鳥取大学附属図書館
郷土資料室

(財)米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 30

鳥取県米子市

米子城跡

第25次調査

1999
財団法人 米子市教育文化事業団

0.2
on
))

序

鳥取県西部に位置する米子市は北に日本海、東に大山を控える自然環境に恵まれた地域であります。また、古代からの遺跡の宝庫で、歴史的、文化的遺産にも恵まれています。特に近年では市街地の開発に伴う発掘調査によって江戸時代の米子城下町の様子が徐々に明らかになってきました。

この度報告致します米子城跡第25次調査は鳥取地方・家庭裁判所米子支部庁舎新営工事に伴って発掘調査を実施したもので、陶磁器をはじめとする多くの遺物が出土し、井戸や屋敷の境界を示す溝が検出されています。これらは当時の様子を考えるうえで大変貴重な資料となるものと思われます。

これらの資料が今後の調査研究及び教育のために広く活用され、さらに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえで役に立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました最高裁判所、鳥取地方・家庭裁判所米子支部、並びに地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者、関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成11年 3 月

財団法人　米子市教育文化事業団

理事長　森　田　隆　朝

例　　言

1．本書は鳥取県米子市西町62番地において実施した鳥取地方・家庭裁判所米子支部庁舎新営工事に伴う米子城跡第25次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は最高裁判所の委託を受けて財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3．本書に用いた方位は国土座標北を示し、座標値は国土座標第Ⅴ系を用いた。
4．第２図は国土地理院発行の１：2,500 の米子・境港都市計画計画図（米子市）27を複製、縮小し、加筆したものである。
5．発掘調査にあたっては、植物珪酸体分析、花粉分析、寄生虫分析を（株）古環境研究所に、出土木製品の保存処理を（株）吉田生物研究所に委託した。
6．本書は高橋が執筆、編集した。
7．出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。
8．遺跡の表記方法については平成７年度までは本調査のみに調査順に番号を付して遺跡名としていたが、平成８・９年度は試掘調査を含めて調査順に番号を付し、本調査については調査順に番号を付し、試掘調査については調査順に次数で遺跡名を表した。平成10年度からは本調査、試掘調査とも調査順に次数で遺跡名を表すこととなった。

平成７年度以前	米子城跡１～９遺跡
平成８、９年度	米子城跡第10～20次調査（試掘調査）、米子城跡21・22遺跡（本調査）
平成10年度	米子城跡第23～26次調査

凡　　例

1．発掘調査時における遺構名・遺構番号は報告書作成時において大幅に変更している。新旧の対照は表１の遺構新旧対照表を参照されたい。
2．本報告書において用いた遺構名の略称は次のとおりである。
ＳＥ：井戸・井戸状遺構、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝状遺構、ＳＢ：建物跡、ＳＡ：柵列
Ｐ：ピット
3．本文中、挿図及び写真図版中の遺物番号は一致する。
4．遺物には原則的に遺跡名（略称ＹＪ－25と表示）、層位または遺構名、取上番号、取上年月日を記入した。遺構名及び遺構番号については旧遺構名を記入している。

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
SE－01	SE－01	SK－05	SK－07	SK－25	SK－27	SD－17	SD－17
SE－02	SE－02	SK－06	SK－08	SK－26	SK－28	SD－18	SD－18
SE－03	SE－03	SK－07	SK－09	SK－27	SK－30	SD－19	SD－19
SE－04	SK－02	SK－08	SK－10	SK－28	SK－31	SD－20	SD－20
SE－05	SE－04	SK－09	SK－11	SD－01	SD－02	SD－21	SD－21
SE－06	SE－05	SK－10	SK－12	SD－02	SD－03	SD－22	SD－22
SE－07	SE－06	SK－11	SK－13	SD－03	SD－04	SD－23	SD－23
SE－08	SE－07	SK－12	SK－14	SD－04	SD－05	SD－24	SD－24
SE－09	SK－06	SK－13	SK－15	SD－05	SD－06	SD－25	SD－25
SE－10	SE－08	SK－14	SK－16	SD－06	SD－07	SD－26	SD－26
SE－11	SE－09	SK－15	SK－17	SD－07	SK－01	SD－27	SD－27
SE－12	SE－10	SK－16	SK－18	SD－08	SD－08	SD－28	SD－28
SE－13	SE－11	SK－17	SK－19	SD－09	SD－09	SD－29	SD－29
SE－14	SE－12	SK－18	SK－20	SD－10	SD－10	SD－30	SD－30
SE－15	SE－13	SK－19	SK－21	SD－11	SD－12	SD－31	SD－29
SE－16	桶1	SK－20	SK－22	SD－12	SD－11	埋設桶1	桶2
SK－01	SK－01	SK－21	SK－23	SD－13	SD－13	埋設桶2	桶3
SK－02	SK－03	SK－22	SK－24	SD－14	SD－14	P－40	SD－31
SK－03	SK－04	SK－23	SK－25	SD－15	SD－15	P－41	SK－29
SK－04	SK－05	SK－24	SK－26	SD－16	SD－16		

表1　遺構新旧対照表

目　　次

第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過と方法……1
　第３節　調査組織……2

第２章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の成果……7
　第１節　調査の概要……7
　第２節　検出した遺構と遺物……7
　　１．井　　戸……7
　　２．井戸状遺構……13
　　３．溝状遺構……13
　　４．建 物 跡……27
　　５．柵　　列……27
　　６．埋 設 桶……27
　第３節　遺構外出土遺物……30
　　１．弥生時代の遺物……30
　　２．古墳時代の遺物……30
　　３．古代～中世の遺物……30
　　４．近世の遺物……30
第４章　ま と め……45
第５章　自然科学的分析……48

挿 図 目 次

第１図　調査区配置図……2
第２図　調査地及び周辺遺跡分布図……4
第３図　北西壁土層図……9
第４図　遺構分布図……10～11
第５図　ＳＥ－01・03・07・12遺構図……14
第６図　ＳＥ－13・16遺構図及びＳＥ－13出土遺物実測図……15
第７図　ＳＥ－04・06・08・09・11出土遺物実測図……16
第８図　ＳＤ－01・02・06・14・15出土遺物実測図……19
第９図　ＳＤ－15出土遺物実測図……20
第10図　ＳＤ－16・17出土遺物実測図……22
第11図　ＳＤ－17出土遺物実測図（１）……23
第12図　ＳＤ－17出土遺物実測図（２）……24
第13図　ＳＤ－17出土遺物実測図（３）……25
第14図　ＳＤ－18・19・20・24出土遺物実測図……26
第15図　ＳＢ－01遺構図……28
第16図　ＳＡ－01・02、埋設桶１・２遺構図……29
第17図　遺構外出土遺物（弥生土器）実測図……31
第18図　遺構外出土遺物（弥生土器・須恵器・埴輪・土釜）実測図……32
第19図　遺構外出土遺物（陶器）実測図（１）……35
第20図　遺構外出土遺物（陶器）実測図（２）……36
第21図　遺構外出土遺物（磁器）実測図（１）……37
第22図　遺構外出土遺物（磁器）実測図（２）……38
第23図　遺構外出土遺物（磁器）実測図（３）……39
第24図　遺構外出土遺物（土器・石製品）実測図……40
第25図　遺構外出土遺物（金属製品）実測図……41
第26図　遺構外出土遺物（木製品）実測図（１）……42
第27図　遺構外出土遺物（木製品）実測図（２）……43
第28図　遺構外出土遺物（木製品）実測図（３）……44
第29図　屋敷地変遷図……46

図 版 目 次

図版1　1区全景
2区全景
3区全景
図版2　SD－01～03
SD－04・05
SD－06
図版3　SD－25・26
SD－06・29・31
SD－18～20
図版4　SD－15・16
SD－17
SD－24
図版5　SE－01
SE－03
SE－07
図版6　SE－12
SE－13
SE－16
図版7　SB－01
埋設桶1
埋設桶2
図版8　SE－04・08・09、SD－01・02出土遺物
図版9　SD－14・15出土遺物
図版10　SD－17出土遺物
図版11　SD－17・20・24出土遺物
図版12　遺構外出土遺物（弥生土器・須恵器・土釜）
図版13　遺構外出土遺物（陶器）
図版14　遺構外出土遺物（磁器）1
図版15　遺構外出土遺物（磁器）2
図版16　遺構外出土遺物（木製品）
図版17　植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真（1）
図版18　植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真（2）
図版19　花粉遺体
図版20　寄生虫卵

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

鳥取地方・家庭裁判所米子支部は庁舎の老朽化とともに施設の拡充をはかるために既存の庁舎を取り壊して新たに庁舎を建て替えることとなった。

当地は米子城跡外郭として周知の遺跡内に位置しており、江戸時代の絵図等によって武家屋敷の存在が考えられ、さらに周辺での発掘調査において江戸時代及びそれ以前の遺構、遺物を確認している。そのため事前の発掘調査が必要であることから、米子市教育委員会は平成８年度に試掘調査（米子城跡第11次調査）を実施し、江戸時代の井戸１基と江戸時代の遺物包含層を確認した。この結果をふまえて、事業を実施する最高裁判所と米子市教育委員会との間で遺跡の取り扱いに関する協議を行い、本調査の実施を決定し、最高裁判所から委託を受けて財団法人米子市教育文化事業団が発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過と方法

発掘調査は新たに建設される建物の部分について行った。既存の建物は３棟の建物がコ字状に並んでおり、この３棟の建物に囲まれた部分にはテニスコートがあった。既存の建物については解体され、基礎も撤去されていた。しかし、基礎は現地表面から約１ｍの深さまで達し、さらにその下には建物の沈下を防ぐための松杭が打ってあり、遺構の破壊が懸念された。

敷地内には仮庁舎が建てられ、緊急車両の通路も確保するため、全面調査を行うには排土置き場がなく、場外搬出もできないため、調査区を３つに分けて調査を行い、調査を行っていない部分を排土置き場とした。

調査はまず、既存建物部分のうち、北東の建物と北西の建物の北東側約２／３を行い、次に残りの既存建物の部分を行い、最後にテニスコートの部分を行った。調査区名は調査を行った順番に１～３区とした。

既存建物は解体業者によって既に解体され、基礎まで撤去されており、その部分は埋め戻されているところと、ほとんど埋め戻されていないところがあった。また、既存建物のない部分は裁判所建設時の盛土が60～70cmなされており、調査に先立って建物の基礎を除去した後に埋め戻した土、裁判所建設時の盛土を重機によって除去し、その後人力による掘削、遺構、遺物の検出を行った。

１区の調査は８月３日から表土剥ぎに入り、８月５日から遺構、遺物の検出を開始し、９月８日に終了した。１区では井戸９基、井戸状遺構１基、土坑５基、溝状遺構14条を検出した。

２区の調査は９月10日から表土剥ぎに入り、９月17日から遺構、遺物の検出を開始し、10月28日に終了した。２区では井戸２基、土坑12基、溝状遺構９条、埋設桶１基、柵列１条を検出した。

３区の調査は11月５日から表土剥ぎに入り、11月９日から遺構、遺物の検出を開始し、12月16日に終了した。３区では井戸４基、土坑11基、溝状遺構８条、埋設桶１基、建物跡１棟、柵列１条を検出した。

なお、調査時には地下水位が高く（地下水上面：海抜－0.2ｍ、遺構検出面：海抜０～－0.5ｍ）、さらに砂層であることから、壁面が崩壊する恐れがあり、安全上、井戸、土坑については完掘できなかったものが多い。また、ピットを数基検出しているが、これらのうちいくつかは既存建物の沈下を防ぐ松杭の痕跡である可能性がある。

第3節　調査組織

発掘調査は下記の体制で行われた。

調査主体　財団法人　米子市教育文化事業団
理 事 長　森田隆朝（米子市長）
常務理事　山岡　宏（米子市教育長）
事務局長　渡部勝文
埋蔵文化財調査室
室長　森田禎二（米子市教育委員会教育文化課長）
次長　深田政幸

調査担当　財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室
調査員　高橋浩樹　臨時職員　福嶋昌子　森井あづさ

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　米子市教育委員会

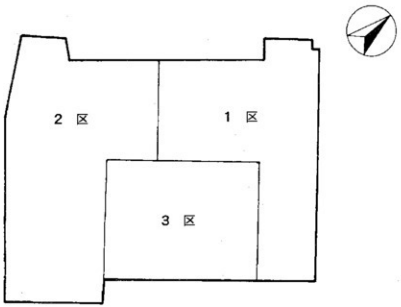
下記の方々が発掘作業員、整理作業員として従事した。（敬称略、50音順）

（発掘作業員）

伊田　美紀	岩指　澄	梅林　明子	浦上　朱美	浦木　勲	遠崎　礼子	
加川　都	加藤カホル	加藤　晴己	加藤　正子	金山勢津子	木京　千尋	
倉敷みさ子	近藤　智子	近藤由美子	西古江美子	桜田　孝具	桜田美智子	
仙田　泰三	高塚　敬子	竹中　光世	田中　恵子	虎尾　一明	長尾かおり	
中山　彪	西　淳夫	西山　和郎	野津　正連	原　満留	平野　昭子	
福田　淳	船越　典子	細田　恵美	前田　利博	前田　光江	松山　節子	
宮田　紀子	本吉　洋子	森安　堯	矢野　早苗	山根　久代		

（整理作業員）

伊田　美紀	入澤美智子	大江由美子	近藤　智子	下高満智子	仙田　泰三
長尾かおり	細田　恵美	前田　利博	松山　節子	宮田　紀子	



第1図　調査区配置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

米子市は鳥取県の西部に位置し、地形的には中国山地から流れる日野川の両岸に広がる沖積平野（米子平野）とこれを取り囲む丘陵からなっている。米子平野は日野川によって形成された日野川扇状地、その北側に低地と発達した砂州からなる日吉津低地、法勝寺川流域に形成された法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなる。

近世の米子は西伯耆の政治、経済の中心であるとともに交通の要衝地でもある。鳥取城下から西へ向かってきた伯耆街道の終点であり、南西から北上してきた出雲街道は当城下東部で伯耆街道と合流する。北部からは北西へ外浜境往来、内浜境往来が走り、東部からは法勝寺往来が南下する。

米子城跡は米子城とその城下町から成る遺跡で、米子市の西部、弓浜半島の基部西側にあり、西は中海に面している。米子城は米子低地の西側縁辺の丘陵先端の標高90ｍの湊山に築かれている。この場所は眼下に中海が一望でき、天然の良港をひかえ、中海水運の要衝地に占地している。城下町は米子城の北・東側に形成されており、湊山の山麓に内堀を巡らせ、さらにその外側にも外堀を巡らせている。内堀の内側（内郭）には天守閣をはじめとする城の諸施設があり、内堀と外堀の間（外郭）には武家屋敷がある。外堀の外には外堀と近世山陰道に沿って職人・町人の町が形成され、寺院を一直線に配置した寺町も形成されている。なお、武家屋敷のある外郭が町（ちょう）と呼ばれたのに対して職人・町人が居住する外堀の外は町（まち）と呼ばれて区分された。

米子城跡第25次調査地は鳥取県米子市西町62番地に所在し、米子城跡の外郭のほぼ中央にあり、城の裏門から北東へのびる道に面している。

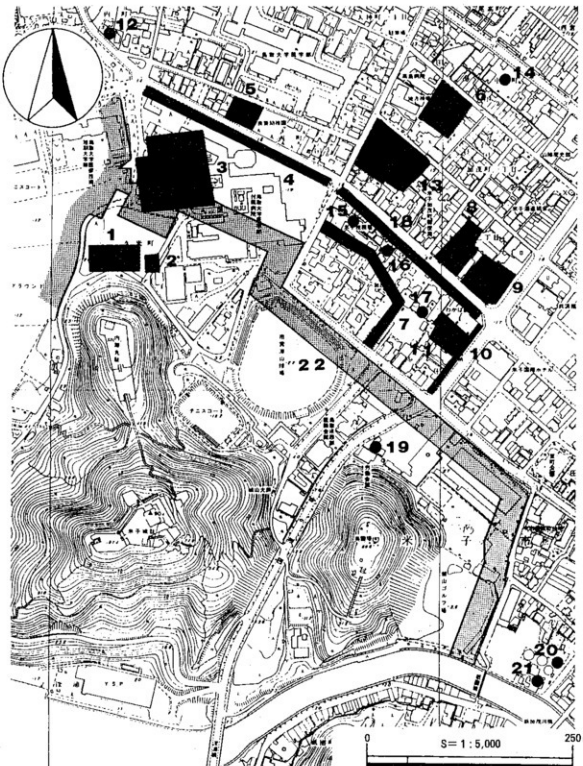
第２節　歴史的環境

近世以前の米子城下は湊山山麓や沖積地の微高地や砂丘上で断続的ではあるが、生活の痕跡が窺える。

縄文時代は久米第１遺跡、米子城跡５・９・21遺跡で岩礁性の旧地形を確認している。久米第１遺跡では縄文時代前期初頭、前期末、中期、晩期の土器、石鏃、石錘、黒曜石剥片などが出土し、米子城跡５・９・21遺跡でも縄文時代晩期の土器が出土している。

弥生時代は米子城跡７遺跡で弥生時代中期の遺物包含層と貝層を確認し、米子城跡21遺跡では弥生時代中期の土坑14基と掘立柱建物１棟が検出されている。また、米子城跡６遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の土坑と溝を検出している。久米第１遺跡では弥生時代前期～後期の土器、米子城跡21遺跡では弥生時代前期～中期後葉の土器、米子城跡５遺跡では弥生時代前期の土器が出土している。米子城跡２・６遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土しており、特にその中に畿内系土器が含まれていることが注目される。

古墳時代は米子城跡21遺跡で古墳時代前期の溝１条と６世紀後半の土坑１基が検出されている。米子城跡21遺跡では古墳時代前期～後期の土器が出土しており、特に前期のものには畿内系土器がみられる。また、米子城跡１遺跡、久米第１遺跡では古墳時代前期の土器が出土している。米子城跡１遺跡では埴輪が出土し、久米第１遺跡でも６世紀中葉～７世紀中葉の須恵器とともに埴輪が出土しており、城山に古墳群が存在することが示唆される。また、米子城跡３・７・９・21遺跡では古墳時代後期の須恵器が出土しており、これらの出土地点は湊山山麓から加茂神社を経て北東へ帯



1	久米第1遺跡	7	米子城跡７遺跡	13	米子城跡第25次調査	19	米子城跡第12次調査
2	米子城跡５遺跡	8	米子城跡９遺跡	14	米子城跡第23次調査	20	米子城跡第20次調査
3	米子城跡１遺跡	9	米子城跡３遺跡	15	米子城跡第18次調査	21	米子城跡第19次調査
4	米子城跡６遺跡	10	米子城跡22遺跡	16	米子城跡第13次調査	22	内　　堀
5	米子城跡２遺跡	11	米子城跡８遺跡	17	米子城跡第14次調査		
6	米子城跡４遺跡	12	米子城跡第15次調査	18	米子城跡21遺跡		

第２図　調査地及び周辺遺跡分布図

西暦	年号	事項
1467	応仁元年	この頃山名教之の配下山名宗幸が飯山砦を築いたという。
1470	文明2年	伯耆の山名軍が出雲に乱入したが、尼子清定に逆襲され退いて、米子城にこもる。
1513	永正10年	出雲の尼子経久この頃から米子城などをしばしば攻める。
1524	大永4年	尼子経久は山名澄之の援助と称して伯耆に攻め入り、米子城などが従えられ、尾高城主行松正盛は城を去る。
1562	永禄5年	この頃から米子城などは毛利氏によって制圧される。この頃、城主は山名秀之か。
1571	元亀2年	尼子氏再興軍の羽倉孫兵衛が米子城を攻め、城下を焼き打ち。城主福頼元秀。
1581	天正9年	古曳吉種がこの頃から米子城主。
1591	天正19年	出雲伯耆の領主吉川広家が、米子湊山に築城開始。城主古曳吉種。
1592	文禄元年	吉川広家が古曳吉種とともに朝鮮役に従軍し、吉種はこの年戦歿。
1598	慶長3年	吉川広家富田城に帰り、湊山築城を監督。米子港・深浦港整備も始まる。
1600	慶長5年	関ヶ原戦の結果、吉川広家は周防国岩国へ転封。駿河国府中城主中村一忠が伯耆国領主となる。この年までに米子城工事は7割ぐらい進行。
1602	慶長7年	この年、中村一忠は尾高城から米子城に移る。
1610	慶長15年	伯耆国会見・汗入郡6万石領主として美濃国黒野城主加藤貞泰の転封を発令。
1615	元和元年	幕府は一国一城令を発したが、米子城保存と決まる。
1617	元和3年	加藤貞泰は、伊予国大洲に転封。因伯の領主となった池田光政の一族池田由之が米子城預かり（3万2千石）となる。
1632	寛永9年	池田光仲が因伯の領主となり、家老荒尾成利が米子城預かりとなり、成利弟の成政を米子につかわし、城の管理をさせる。
1665	寛文5年	米子城内堀に柴積み船の入ることを禁止（堀が埋まる害あり）。
1667	寛文7年	米子城西北部外曲輪修理。
1673	寛文13年	城下侍屋敷の空家について、荒尾氏が米子町奉行に命じて適当に処分することを許可。
1697	元禄10年	大風で米子城本丸四重櫓1尺5寸程傾く。
1720	享保5年	米子城米蔵約半数大修理、壁・屋根部分に川石を主体として約2万個使用。
1723	享保8年	城下郭内屋敷田31町歩余の内、水利不足により畑に改めを認められたもの約3分の1。
1796	寛政8年	城下外郭筋堀の埋没を浚渫（以後しばしば町人富豪に請け負わせる）。
1806	文化3年	伊能忠敬米子町測量第1回、米子城郭内測量を米子役人が拒否する。
1843	天保14年	異国船警衛のため、荒尾成裕、米子城入りする。
1852	嘉永5年	四重櫓とその石垣、富豪鹿島家の負担によって大修理される。
1869	明治2年	二月、荒尾氏自分手政治廃止の発令。五月、朝廷より米子城返上の命令あり。八月、米子城を藩庁に引渡す。
1872	明治5年	米子城山は士族小倉直人らに払下げとなる。
1873	明治6年	城内の建物類売却され、数年後取りこぼされる。
1902	明治35年	城山本丸を整備して弘楽園とする。

表2　米子城年表

状に分布しており、現在は削平されているが、これに沿うように尾根がのび、ここに古墳群が築かれていた可能性がある。

奈良～平安時代は米子城跡21遺跡で11～12世紀の井戸と土坑が検出され、米子城跡６遺跡でも平安時代後半の土坑が検出されている。米子城跡６遺跡では河川堆積による砂層から８世紀中葉～９世紀後半の土器が出土し、久米第１遺跡では奈良～平安時代前半の土器が出土している。

中世は久米第１遺跡では15世紀後半～16世紀中葉に大規模な造成が行われている。中世の米子の町並形成については、島津家「家久君上京日記」（天正３年　1576年）に「よなこといへる町に着き」とあり、また、城下の大部分の遺跡から中世後半の遺物が出土しており、飯山山麓から湊山山麓にかけて中世米子城の城下町的な町が形成されていたものと思われる。また、久米第１遺跡では焼土層と炭化したオムスビ状の米塊を確認し、多くの五輪が井戸に捨てられた状態で検出されており、元亀２年（1571年）に羽倉孫兵衛が米子城を攻め、城下を焼き討ちしたことを裏付けている。

米子城の始まりは応仁～文明年間（1467～87年）に出雲国守護代尼子氏と伯耆山名氏との合戦の際、山名教之の一門、山名宗幸により出雲・伯耆国境警備の砦として築かれたものである。この砦は近世米子城の本丸が置かれた湊山の東側にある独立丘陵飯山（標高59m）に築かれている。

文献による“米子城”の初見は『出雲私史』の文明２年（1470年）の記述にみられ、その後も米子城は伯耆・出雲国境にあり、中海を臨む軍事、政略上の重要地でもあることから、尼子氏、毛利氏による攻守争奪の場となる。

近世米子城は天正19年（1591年）に東出雲・隠岐・西伯耆12万石を領有する吉川広家によって築城が開始されるが、慶長５年（1600年）に吉川氏は関ヶ原戦に敗北し、周防国岩国に転封となる。『戸田幸太夫覚書（吉川家文書）』によると、この時点で米子城は「十の内七つ程も出来候」とある。その後、吉川氏にかわって伯耆18万石の領主となった中村一忠によって慶長７年（1602年）に城が完成する。「米子城石垣御修覆御願絵図」（寛文７年　1667年）、「湊山金城米子新府」（享保５年　1720年）などの絵図によれば、城は湊山を本丸とし、その北据に二の丸、三の丸を配し、さらに、飯山（采女丸）、丸山（内膳丸）を出丸として構成され、南・東・北に内・外二重の堀を巡らしている。城の裏手の深浦には中世以来の城の防衛と物資輸送の要地として、御船手曲輪が置かれ、ここに御船頭屋敷、番人小屋、船小屋が設けられていた。本丸には五重の大天主と四重の副天主（四重櫓）があり、内膳丸には櫓と倉庫が備えられていた。また、二の丸には城主館、櫓、武器庫、侍部屋、三の丸には作事小屋、厩、材料小屋、米蔵、詰所等が配されていた。

中村氏は在城８年で断絶し、慶長15年（1610年）には伯耆国会見・汗入郡６万石の領主として加藤貞泰が城主となる。そして、元和３年（1617年）には因幡・伯耆の領主となった池田光政の一族池田由之が米子城預かり（３万２千石）となる。その後、寛永９年（1632年）からは池田家の家老荒尾氏が米子城預かり（１万５千石）となり、以後明治２年（1869年）まで続いた。城は明治５年（1872年）に士族に払い下げとなり、明治６年（1873年）には城内の建物類は売却され、数年後には取り壊される。

調査地は「伯耆国米子平図」（宝永６年　1709年）と「湊山金城米子新府」（享保５年　1720年）では金万平右衛門と戸田弥惣の屋敷となっているものと思われ、「米子御城下図」（明和６年　1769年）では小原、鈴木、戸田、尾関の４件の屋敷となっている。また、「米子城市図」（安政年間　1854～59年）と「米子町田畑御改宗旨地積総計」（明治３年　1870年）では戸田と小原の屋敷となっているものと思われる。

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

調査は排土置き場の都合上、まず既存建物のうち、北東の建物と北西の建物の北東側約２／３から行い、次に残りの既存建物の部分を行い、最後にテニスコートの部分を行った。１区については建物の基礎が現地表面から約１ｍの深さまで達してはいたものの、江戸時代の遺物包含層、遺構面は比較的良好に遺存していた。また、２区についても建物の基礎が現地表面から約１ｍの深さまで達し、さらに、建物建設の際の攪乱が著しかったが、江戸時代の遺物包含層、遺構面は比較的良好に遺存していた。３区については既存建物が建っていなかったため、幕末～明治の整地土、江戸時代の遺物包含層、遺構面は良好に遺存していた。

今回の調査では江戸時代の井戸14基、井戸状遺構１基、土坑28基、溝状遺構31条、柵列２条、建物跡１棟、埋設桶２基を検出し、近世の陶磁器や木製品、弥生土器、須恵器等が出土した。

基本層序は現地表面より表土及び戦後の建物建設に伴う盛土、橙褐色土・淡灰色土（第１層）、灰茶褐色土（第２層）、灰褐色土（第３層）、黒灰色粘質土（第４層）となっており、さらに、その下層は洪水堆積による厚い砂層（第５層）となっている。第１層は幕末～明治にかけての整地土で、明治10年に開設された米子区裁判所の建物建設に伴うものと思われる。この層の上面で土坑１基（ＳＫ－01）、埋設桶２を検出した。また、埋設桶１も残存状況から第１層から掘り込まれている可能性がある。第２、３層は江戸時代後半の遺物包含層で、第３層上面で江戸時代の遺構を検出した。第４層は著しく削平を受けているため、わずかしか遺存していないが、弥生時代中期～中世後半の遺物を包含する。第５層の洪水堆積層には弥生時代中期の土器が数点認められる。

第２節　検出した遺構と遺物

１．井　戸

井戸は15基検出した。このうち素掘りで井戸枠をもたないものが10基と大部分を占め、これ以外には井戸枠が木組のもの（ＳＥ－01）、石組のもの（ＳＥ－07・ＳＥ－13）、曲物を用いたもの（ＳＥ－03）、桶を用いたもの（ＳＥ－12）がある。

ＳＥ－01（第５図）

ＳＥ－01は掘方の北東側が調査区外にあり、さらに、北西側はＳＤ－04によってきられているため平面形態は判然としないが、隅丸方形を呈するものと思われる。掘方は現状で北西－南東の長さ1.6ｍをはかる。掘方内には一辺0.7ｍ、深さ0.7ｍをはかる平面正方形の木組の井戸枠がある。井戸枠は四隅に一辺６㎝の角材を打ち込み、側板は幅15～23㎝、厚さ１㎝の板を各辺３～４枚縦にはめこみ、その上に径４～５㎝の丸木をわたしている。

ＳＥ－01からは遺物は出土しなかった。

ＳＥ－02

ＳＥ－02は径1.6 ～1.8ｍをはかる平面円形の素掘の井戸である。完掘はできなかったが、ピンポールを差し込んで確認したところ、深さは0.8ｍであると推定される。

ＳＥ－02からは図化できるものはないが、肥前系磁器、陶器、焙烙、土師器皿、須佐唐津焼擂鉢

等が出土した。
出土遺物からＳＥ－02は江戸時代後半のものであると考えられる。

ＳＥ－03（第５図）

ＳＥ－03は径1.6 ～1.8ｍをはかる平面不整円形の掘方内に径40㎝の曲物を重ねた井戸枠がある。井戸枠の周囲には25～30㎝大の石が３個あり、井戸枠の周囲または上部に石を用いていた可能性がある。完掘はできなかったが、ピンポールを差し込んで確認したところ、掘方の深さは1.1ｍ、井戸枠の深さは0.8ｍであると推定される。
ＳＥ－03からは遺物は出土しなかった。

ＳＥ－04（第７図）

ＳＥ－04は北東側約半分が調査区外にあり、さらに、北西側は攪乱を受けているため、規模及び平面形態は判然としないが、平面形態は円形を呈するものと思われる。素掘の井戸である。完掘はできなかったが、ピンポールを差し込んで確認したところ、深さ0.8ｍであると推定される。
ＳＥ－04からは木札（４）の他に、図化できるものはないが、肥前系陶器、肥前系磁器、備前焼、土師器皿、瓦等が出土した。
４は長さ11.3㎝、幅5.3㎝、厚さ１㎝の板の四隅を斜めに切り落としたもので、表には「麦？」、裏には「なめ」の墨書がある。
出土遺物からＳＥ－04は18世紀後半～19世紀前半のものであると考えられる。

ＳＥ－05

ＳＥ－05は径1.4 ～1.6ｍをはかる平面円形の素掘の井戸である。完掘はできなかったが、ピンポールを差し込んで確認したところ、深さ0.8ｍであると推定される。
ＳＥ－05からは遺物は出土しなかった。

ＳＥ－06（第７図）

ＳＥ－06は長径2.2ｍ、短径1.7ｍをはかる平面楕円形の素掘の井戸である。完掘はできなかったが、ピンポールを差し込んで確認したところ、深さ0.6ｍであると推定される。
ＳＥ－06からは瓦質鉢（５、６）が出土した。
５、６は瓦質焼成された鉢で、５は内面を粗いハケ調整、６は内外面をハケ調整している。
出土遺物からＳＥ－06は中世まで溯るものと考えられる。

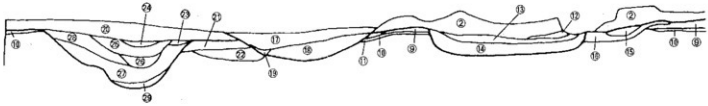
ＳＥ－07（第５図）

ＳＥ－07は径1.5 ～1.8ｍをはかる平面円形の掘方内に平面円形の石組の井戸枠がある。井戸枠の内法径は0.6ｍ、深さ0.3ｍをはかり、石組は下部の２段のみ残存する。
ＳＥ－07からは遺物は出土しなかった。

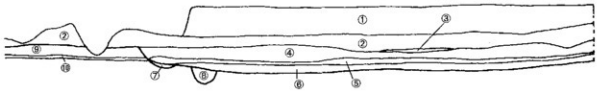
ＳＥ－08（第７図）

ＳＥ－08は径1.8ｍをはかる平面円形の素掘の井戸である。完掘はできなかったが、ピンポールを差し込んで確認したところ、深さ1.0ｍであると推定される。
ＳＥ－08からは図化できるものが少ないが、肥前系陶器、肥前系磁器、在地系陶器、須佐唐津焼擂鉢、京焼系陶器、備前焼、瓦等が出土した。
７は肥前系磁器の小坏、８は京焼系陶器の碗である。９は在地系陶器の甕で、外面は白化粧の上

H=1,00m



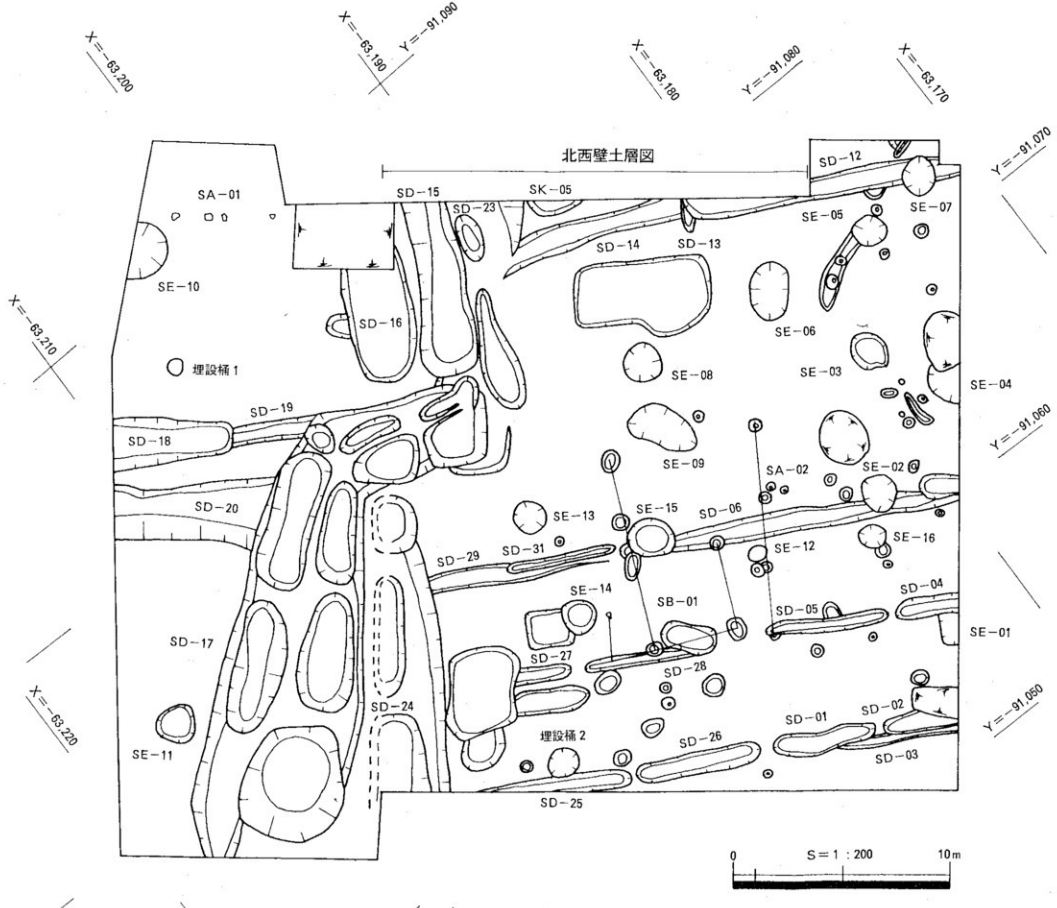
H=1,00m



0　S＝1：60　2m

① 橙褐色土（第１層　幕末～明治の整地土）
② 灰茶褐色土（第２層）
③ 灰白色細粒砂
④ 褐色土（ＳＤ－12）
⑤ 暗茶褐色粘質土（ＳＤ－12　腐植土）
⑥ 暗灰色粘土（ＳＤ－12）
⑦ 暗灰色粘質土（ＳＤ－14）
⑧ 灰褐色粘質土（ＳＤ－13　砂混じり）
⑨ 灰褐色土（第3層　上面：遺構面）
⑩ 黒灰色粘質土（第4層　弥生時代中期～中世の遺物包含層）
⑪ 灰色粘土
⑫ 淡灰色細粒砂
⑬ 暗茶色粘質土（ＳＫ－05　腐植土）
⑭ 灰色細粒砂（ＳＫ－05）
⑮ 暗茶灰色粘質土
⑯ 灰褐色砂
⑰ 暗灰色粘質土（ＳＤ－23）
⑱ 灰色粘質土（ＳＤ－23）
⑲ 灰褐色粘質土（ＳＤ－23）
⑳ 淡灰色土（明治の整地土か？）
㉑ 暗茶色粘質土（腐植土）
㉒ 灰茶褐色粘質土
㉓ 灰褐色粘質土（ＳＤ－15）
㉔ 灰茶色シルト（ＳＤ－15）
㉕ 灰色粘質土（ＳＤ－15　礫・粘土ブロックを含む）
㉖ 灰褐色粘質土（ＳＤ－15　腐植土を含む）
㉗ 茶褐色シルト（ＳＤ－15　腐植土）
㉘ 茶褐色粘質土（ＳＤ－15　腐植土　細粒砂・粘土ブロックを含む）
㉙ 淡灰色粘土（ＳＤ－15）

第３図　北西壁土層図


X=-63,200
X=-63,190
Y=-91,090
X=-63,180
Y=-91,080
X=-63,170
Y=-91,070
X=-63,210
Y=-91,060
X=-63,220
Y=-91,050
北西壁土層図
SA-01
SD-15
SK-05
SD-23
SD-12
SE-05
SE-07
SD-14
SD-13
SE-10
SD-16
SE-06
埋設桶 1
SE-08
SE-03
SE-04
SD-19
SD-18
SE-09
SA-02
SE-02
SD-20
SE-13
SE-15
SD-06
SE-16
SD-29
SD-31
SE-12
SE-14
SB-01
SD-04
SD-05
SE-01
SD-17
SD-27
SD-28
SD-24
SD-01
SD-02
SE-11
埋設桶 2
SD-26
SD-03
SD-25
0
S=1 : 200
10m

第 4 図　遺構分布図

に鉄絵装飾を施す。10～13は木製品である。10は漆塗椀で、内面赤色、外面黒色で、外面には紋様を描く。11は刀の柄であると思われる。３ヶ所に幅１cmの皮を巻き、皮と皮との間には糸を巻いて漆を塗って仕上げたものと思われる。12、13は栓である。

出土遺物からＳＥ－08は18世紀後半～19世紀前半のものであると考えられる。

ＳＥ－09（第７図）

ＳＥ－09は長径4.3m、短径1.7mをはかる平面不整楕円形の素掘の井戸である。完掘はできなかったが、ピンポールを差し込んで確認したところ、深さ1.0mであると推定される。

ＳＥ－09からは図化できるものが少ないが、肥前系陶器、肥前系磁器、在地系陶器、須佐唐津焼擂鉢、備前焼、焙烙、土師器皿、瓦等が出土した。

14、15は肥前系磁器である。14は皿で、見込みには五弁花文がある。15は蓋である。16は土師器皿で、ロクロ成形を行い、底部には回転糸切痕がある。17は在地系陶器の碗、18は焙烙である。

出土遺物からＳＥ－09は18世紀後半～19世紀前半のものであると考えられる。

ＳＥ－10

ＳＥ－10は南東側約半分が調査区外にあるが、平面円形を呈するものと思われる。径2.7m、深さ0.4mをはかる素掘の井戸である。

ＳＥ－10からは図化できるものはないが、肥前系磁器、備前焼等が出土した。

出土遺物からＳＥ－10は江戸時代後半のものであると考えられる。

ＳＥ－11（第７図）

ＳＥ－11は径1.8m、深さ0.1mをはかる平面円形の素掘の井戸である。

ＳＥ－11からは図化できるものが少ないが、肥前系陶器、肥前系磁器、土師器皿等が出土した。

19は土師器皿で、手づくね成形を行っている。20は肥前系陶器の皿である。

出土遺物からＳＥ－11は江戸時代後半のものであると考えられる。

ＳＥ－12（第５図）

ＳＥ－12は径0.8mをはかる平面円形の掘方内に桶を転用した井戸枠がある。井戸枠は底径60cm、口径70cm、深さ65cmの桶を逆にして据えたもので、桶は幅５～10cm、厚さ２cmの28枚の側板からなり、外面にはタガの痕跡が認められた。

ＳＥ－12からは遺物は出土しなかった。

ＳＥ－13（第６図）

ＳＥ－13は径1.5～1.7mをはかる平面円形の掘方内に平面円形の石組の井戸枠がある。井戸枠の内法径は0.6～0.7m、深さ0.8mをはかる。

ＳＥ－13からは肥前系磁器（１、２）、青磁（３）が出土した。

出土遺物からＳＥ－13は江戸時代後半のものであると考えられる。

ＳＥ－14

ＳＥ－14は径1.6m、深さ0.3mをはかる平面不整円形の素掘の井戸である。

ＳＥ－14からは遺物は出土しなかった。

ＳＥ－15

ＳＥ－15は径1.8～2.2ｍ、深さ0.5ｍをはかる平面楕円形の素掘の井戸である。

ＳＥ－15からは遺物は出土しなかった。

2．井戸状遺構（第６図）

ＳＥ－16は長径1.3ｍ、短径1.0ｍ、深さ0.1ｍをはかる平面楕円形の掘方内に、径65㎝の桶の蓋板と残存高10～20㎝をはかる２枚の側板がある。これは桶を逆に据えて井戸枠としたものと思われる。底板（蓋板）は幅14～28㎝、厚さ３㎝の３枚の板からなり、そのうちの１枚には径８㎝の孔がある。この孔には竹が差し込んであり、さらに底板（蓋板）の下部へと続いており、下部から桶内に水を引き込んだものと思われる。

ＳＥ－16からは遺物は出土しなかった。

3．溝状遺構

溝状遺構は31条検出したが、ここでは屋敷境界を示すと思われるＳＤ－01～06・12・14～20・24～29・31について報告する。

ＳＤ－01～03・25・26（第８図）

ＳＤ－01～03・25・26は途切れてはいるが、これらは主軸がほぼ同じで、一直線上に並んでいることから、同一の屋敷境界を示す溝であると思われる。

ＳＤ－01は長さ3.8ｍにわたって検出し、幅0.7～1.1ｍ、深さ0.2ｍをはかる。主軸はＮ－25°－Ｅである。

ＳＤ－01からは肥前系陶器の皿（21、22）が出土した。いずれも目跡は認められない。

出土遺物からＳＤ－01は17世紀前半のものであると考えられる。

ＳＤ－02はＳＤ－01の北東にあり、北東側は調査区外にのび、さらに攪乱を受けているため規模は不明であるが、現状で長さ3.2ｍにわたって検出し、幅0.7～1.0ｍ、深さ0.3ｍをはかる。主軸はＮ－28°－Ｅである。

ＳＤ－02からは肥前系陶器の皿（23）が出土した。23は口縁が外反し、目跡は認められない。

出土遺物からＳＤ－02は17世紀前半のものであると考えられる。

ＳＤ－03は北東側が調査区外にのび、さらにＳＤ－01・02によって切られているため規模は不明であるが、現状で長さ5.4ｍにわたって検出し、幅0.4ｍ、深さ５㎝をはかる。主軸はＮ－29°－Ｅである。

ＳＤ－03からは遺物は出土しなかった。時期はＳＤ－01・02に切れらていることから、ＳＤ－01・02に先行するものと考えられる。

ＳＤ－25はＳＤ－26の南西にあり、南西側は調査区外にのびているため規模は不明であるが、現状で長さ7.2ｍにわたって検出し、幅0.8ｍ、深さ0.2ｍをはかる。主軸はＮ－30°－Ｅである。

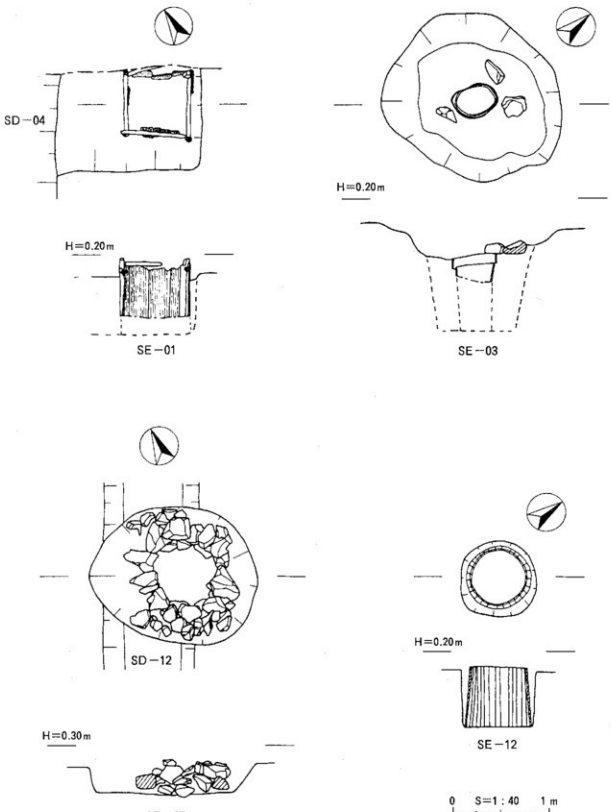
ＳＤ－25からは遺物は出土しなかったが、ＳＤ－01・02と同時期のものと考えられる。

ＳＤ－26はＳＤ－01の南西にあり、長さ5.9ｍにわたって検出し、幅0.9～1.0ｍ、深さ0.4ｍをはかる。主軸はＮ－25°－Ｅである。

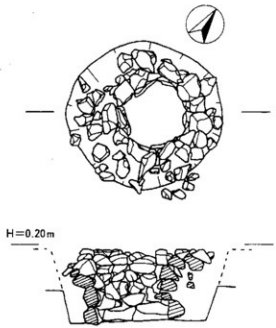
ＳＤ－26からは図化できなかったが、鉄絵装飾を施した肥前系陶器が出土した。時期は17世紀前半であると考えられる。

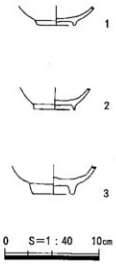
ＳＤ－04・05・27・28

ＳＤ－04・05・27・28は途切れてはいるが、これらは主軸がほぼ同じで、一直線上に並んでいる

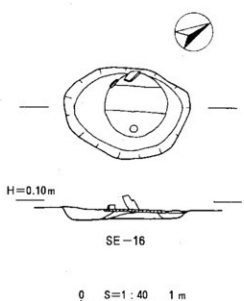


第5図　SE－01・03・07・12遺構図

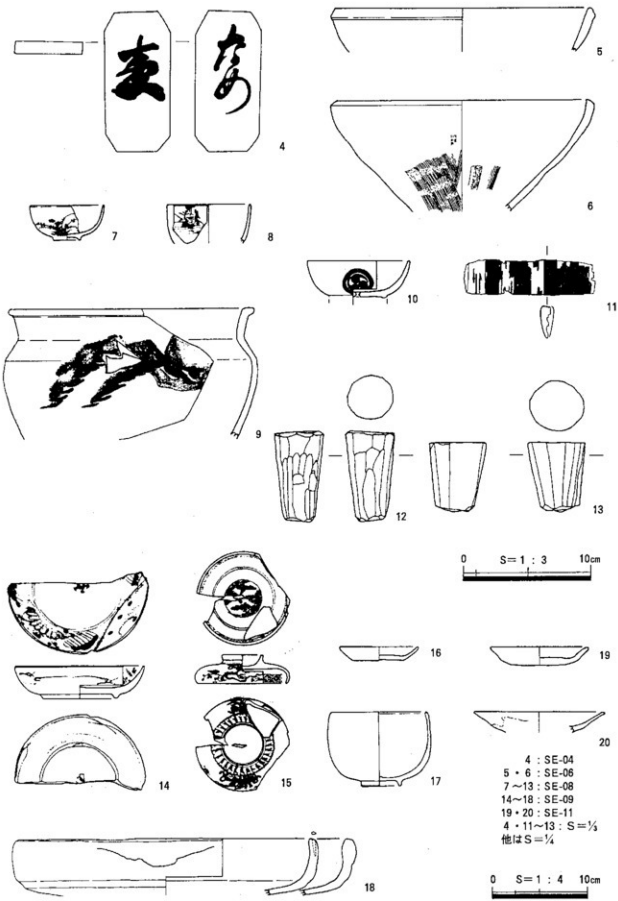




SE－13 出土遺物



第6図　ＳＥ－13・16遺構図及びＳＥ－13出土遺物実測図



第7図　ＳＥ－04・06・08・09・11出土遺物実測図

ことから、同一の屋敷境界を示す溝であると思われる。

ＳＤ－04は北東側が調査区外にのびているため規模は不明であるが、現状で長さ3.0ｍにわたって検出し、幅0.8ｍ、深さ0.3ｍをはかる。主軸はＮ－30°－Ｅで、ＳＥ－01を切っている。

ＳＤ－04からは遺物は出土しなかった。

ＳＤ－05はＳＤ－04の南西にあり、長さ4.1ｍにわたって検出し、幅0.6～0.7ｍ、深さ0.3ｍをはかる。主軸はＮ－29°－Ｅである。

ＳＤ－05からは遺物は出土しなかった。

ＳＤ－27はＳＤ－28の南西にあり、南西側はＳＫ－22によって切られているため規模は不明であるが、現状で長さ2.8ｍにわたって検出し、幅0.7～0.8ｍ、深さ0.2ｍをはかる。主軸はＮ－28°－Ｅである。

ＳＤ－27からは遺物は出土しなかった。

ＳＤ－28はＳＤ－05の南西にあり、北東側はＳＫ－26によって切られているため規模は不明であるが、現状で長さ4.9ｍにわたって検出し、幅0.4～0.5ｍ、深さ0.2ｍをはかる。主軸はＮ－29°－Ｅである。

ＳＤ－28からは遺物は出土しなかった。

ＳＤ－06・29・31（第８図）

ＳＤ－06とＳＤ－29・31は途切れてはいるが、これらは主軸がほぼ同じで、一直線上に並んでいることから、同一の屋敷境界を示す溝であると思われる。

ＳＤ－06は北東側が調査区外にのびているため規模は不明であるが、現状で長さ1.6ｍにわたって検出し、幅0.8～1.1ｍ、深さ0.15ｍをはかる。主軸はＮ－28°－Ｅである。

ＳＤ－06からは肥前系磁器の外青磁の碗（24）が出土した。

出土遺物からＳＤ－06は18世紀後半～19世紀前半のものであると考えられる。

ＳＤ－29はＳＤ－06の南西にあり、南西側はＳＤ－24に合流している。北東側は削平されており、ＳＤ－06とつながる可能性がある。幅0.8～0.9ｍ、深さ0.3ｍをはかり、主軸はＮ－29°－Ｅである。

ＳＤ－29からは遺物は出土しなかったが、ＳＤ－06と同時期のものと考えられる。

ＳＤ－31はＳＤ－29を切っており、長さ5.1ｍにわたって検出し、幅0.4～0.5ｍ、深さ0.2ｍをはかる。主軸はＮ－27°－Ｅである。

ＳＤ－31からは遺物は出土しなかったが、ＳＤ－06と同時期のものと考えられる。

ＳＤ－12・14（第８図）

ＳＤ－12・14は切り合い関係から時期差が考えられるが、主軸がほぼ同じで、一直線上にのびていることから、同一の屋敷境界を示す溝であると思われる。

ＳＤ－12は北東側が調査区外にのびているため規模は不明であるが、現状で長さ13.2ｍにわたって検出し、幅1.0～1.2ｍ、深さ0.15ｍをはかる。主軸はＮ－28°－Ｅである。

ＳＤ－12からは遺物は出土しなかった。

ＳＤ－14は両端をＳＤ－12・13とＳＤ－23によって切られているが、幅0.9～1.3ｍ、深さ0.2ｍをはかる。主軸はＮ－23°－Ｅである。

ＳＤ－14からは木簡（25）が出土した。木簡は長さ20.5㎝、幅２～３㎝、厚さ0.6㎝をはかり、表には「戸田様　木村」、裏には２文字目は判読できないが、「大□壹本」の墨書がある。

ＳＤ－15～17・24（第８～14図）

ＳＤ－15とＳＤ－16は0.3～0.7ｍの間隔をあけてほぼ平行し、さらに、両溝の南東側がＳＤ－17

との間に0.4～1.0ｍの間隔をあけてほぼ同じ位置で完結することと、ＳＤ－24はＳＤ－16の延長上にあり、ＳＤ－17との間に0.5ｍの間隔をあけて完結すること、さらに、ＳＤ－17の北東側がＳＤ－15の北東側の肩とほぼ同じ位置で完結していることから、これらは相互に意識してつくられたものと思われる。また、いずれの溝もほぼ同時期（17世紀中葉～18世紀前半の遺物は少ないが、江戸時代を通じて存続する。）の遺物が出土していることから、これらはほぼ併存していたものと思われ、位置的にこれらは街区を２分するとともに屋敷境界を示すものと思われる。

ＳＤ－15は北西側が調査区外にのびているため規模は不明であるが、現状で長さ8.0ｍにわたって検出し、幅2.1～2.6ｍ、深さ0.7ｍをはかる。主軸はＮ－63°－Ｗである。

ＳＤ－15からは肥前系陶器、肥前系磁器、在地系陶器、備前焼、土師器皿、瓦、木製品等が出土した。

26～35は陶器、36～38は磁器、39～44は土師器皿、45～50は木製品である。

26～31は肥前系陶器の皿である。26は口縁が外反し、見込みには胎土目がある。27、28は見込みに砂目をもつ。28は溝縁皿で、見込みには砂目と重ね焼きした際に付着した高台の痕跡がある。また、高台畳付にも砂が付着している。29～31は目跡をもたないものである。32～34は肥前系陶器の碗である。35は肥前系陶器の大皿で、内面には象嵌を施し、見込みには砂目がある。

36～38は肥前系磁器の碗である。36は器壁が薄く、区画内に紋様を描く。37、38は外面に一重網目文を描く。

39～44は土師器皿である。39は手づくね成形、40～44はロクロ成形を行っており、40、41の底部には回転糸切痕、42～44の底部には静止糸切痕がある。

45～50は木製品である。45～47は一木連歯下駄である。45、46は台部が長方形を呈し、47は台部が小判形を呈する。48は鋤状木製品で、断面長方形の柄には孔があり、この部分にさらに長い柄を装着したものと思われる。49は桶あるいは樽の蓋板で、復元すると径43㎝前後になるものと思われる。この蓋板には径３㎝の孔がある。50は長さ24.6㎝、径0.6㎝の箸である。

ＳＤ－16は北西側が調査区外にのび、さらに、攪乱を受けているため規模は不明であるが、現状で長さ6.3ｍにわたって検出し、幅2.8～3.0ｍ、深さ0.8ｍをはかる。主軸はＮ－68°－Ｗである。

ＳＤ－16からは図化できるものが少ないが、肥前系陶器、肥前系磁器、土師器皿、木製品等が出土した。

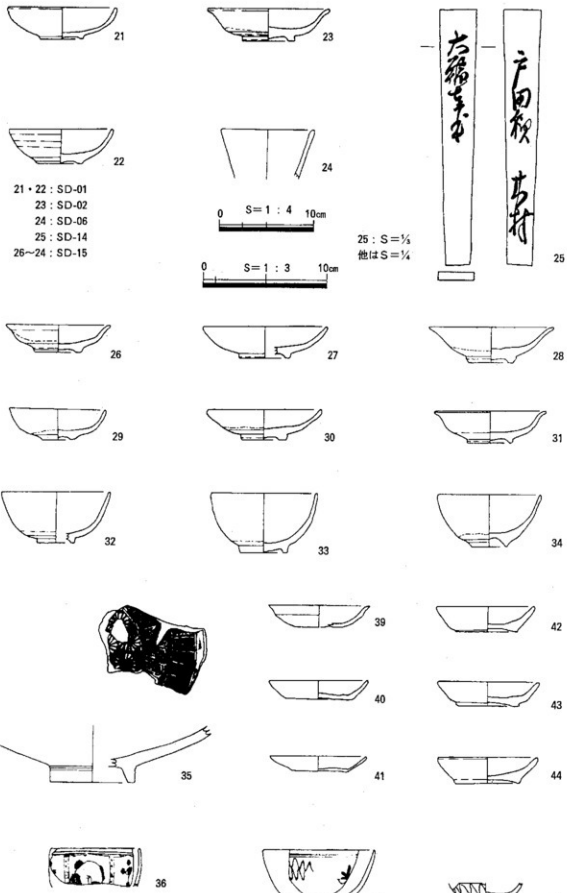
51～53は木製品である。51は漆塗椀である。高台は高く、内面赤色、外面黒色である。52は櫛で、歯を欠く。53は鍬の先である。鍬は当遺跡の第２層と米子城跡21遺跡からも出土しており、屋敷地内などで農作業を行っていた可能性がある。

ＳＤ－17はＬ字状に屈曲し、北東－南西方向の部分は幅5.2ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、主軸はＮ－24°－Ｅである。一方、南東－北西方向の部分は幅4.4～6.7ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかるが、南東端は幅1.6～2.4ｍとなる。主軸はＮ－44°－Ｗである。

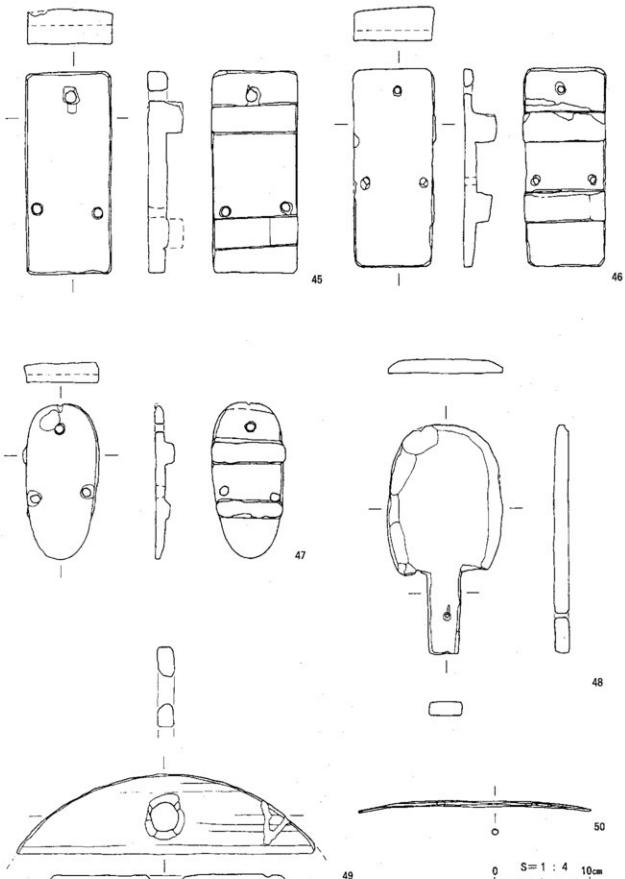
ＳＤ－17の底には溝の主軸に平行するように長径2.0～6.4ｍ、短径0.7～2.6ｍ、深さ0.2～0.3ｍをはかる２対８基の平面楕円形～長楕円形と隅丸方形状のくぼみがあり、溝の南東端にも長径5.3ｍ、短径4.8ｍ、深さ0.3ｍをはかる平面不整形のくぼみがある。また、西側のコーナー部分にも長径1.6ｍ、短径1.2ｍ、深さ0.3ｍをはかる平面不整円形のくぼみがある。この溝には遺物が多量に廃棄されており、さらに、埋土が腐植土化していることから、生活排水路として利用されたものと思われ、溝底のくぼみの性格については不明な点が多いが、この部分に汚水を溜めて地下に浸透、処理したものではないかと考えられる。

ＳＤ－17からは肥前系陶器、肥前系磁器、在地系陶器、備前焼、土師器皿、瓦、木製品等が出土した。

54～71は陶器、72～81は磁器、82～92は土師器皿、93～104 は木製品である。



第8図　SD－01・02・06・14・15出土遺物実測図



第9図　ＳＤ－15出土遺物実測図

54～61は肥前系陶器の皿である。54、55は胎土目、56は砂目をもつが、57～60は目跡が認められない。61は鉄絵装飾を施したもので、口縁外面には径5㎜前後、高さ3～4㎜の突起状のものを貼り付けている。62～65は肥前系陶器の碗である。62は小型の碗で、見込みに胎土目がある。底部は平底で、回転糸切痕が認められる。63、64は内湾気味に立上がり、口縁はわずかに外反する。63は外面に鉄絵装飾を施している。66は産地不明である。67は京焼系陶器の碗である。68～71は擂鉢である。68、69は備前焼、70、71は須佐唐津焼である。

72～75は肥前系磁器の碗である。72は小型の碗で、内面に鉄絵装飾を施す。73は白磁、74は外青磁で、高台無釉、75は陶胎染付である。80、81は肥前系磁器の小坏である。80は外傾して立上がり、口縁が外反する。81は内湾気味に立上がり、口縁は外反する。外面にはコンニャク印判が施されている。76は中国系磁器の皿である。77～79は肥前系磁器の皿で、いずれも高台径が小さく、高台畳付には砂が付着する。

82～92は土師器皿である。82～85は手づくね成形、86～92はロクロ成形を行っており、86～89の底部には回転糸切痕があり、90～92の底部には静止糸切痕がある。

93～104は木製品である。93、94は漆塗椀である。93は内面赤色、外面黒色で、外面に紋様を描く。94は高台が高く、内面赤色、外面黒色で、外面に紋様を描く。95は径8.9㎝をはかる柄杓あるいは曲物の底板であると思われる。96はヘラ状木製品、97、98は切匙である。99～104は下駄である。99、100は一木連歯下駄で、99は台部が長方形を呈し、100は台部が小判形を呈する。101は台部に歯を釘を打ちつけて固定するものである。102～104は構造下駄の露卯下駄で、102、103はホゾ穴が幅の狭い長方形を呈するが、104は幅の広い長方形を呈する。

ＳＤ－24は現状で長さ13.5ｍにわたって検出したが、幅については南西側の肩を検出できなかったため不明である。

ＳＤ－24の底には溝の主軸に平行するように長径2.6～5.5ｍ、深さ0.2～0.3ｍをはかる3基の平面楕円形～長楕円形のくぼみがあり、ＳＤ－17と同様の性格が考えられる。

ＳＤ－24からは肥前系陶器、肥前系磁器が出土した。

121、122は肥前系陶器の皿である。121は胎土目、122は砂目をもつ。123は肥前系磁器の蓋である。

ＳＤ－18～20（第14図）

ＳＤ－18とＳＤ－19は切り合い関係から多少の時期差が考えられるが、ＳＤ－18～20は出土遺物からほぼ併存していた可能性がある。時期は17世紀前半で、17世紀後半には埋没したものと思われる。また、この両溝間の幅0.6～1.6ｍの空間には土塀や柱穴列は認められなかったが、垣根や生け垣のような遮蔽施設が存在していた可能性がある。あるいは遮蔽施設はなく、通路として利用されていた可能性も考えられる。

ＳＤ－18は南西側が調査区外にのびているため規模は不明であるが、現状で長さ5.4ｍにわたって検出し、幅1.4～2.5ｍ、深さ0.5ｍをはかる。主軸はＮ－33°－Ｅである。

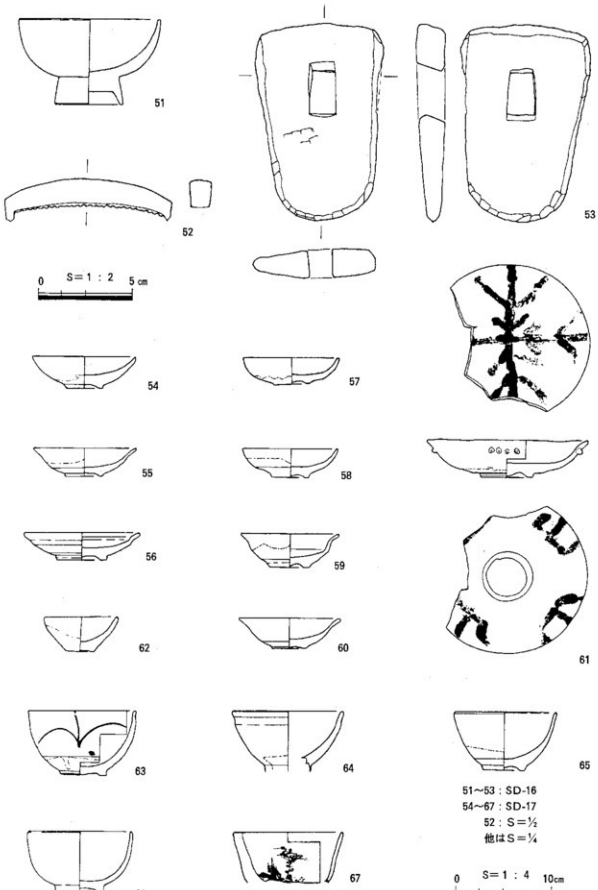
ＳＤ－18からは肥前系陶器、肥前系磁器、土師器皿が出土した。

105は肥前系陶器の皿で、口縁に鉄絵装飾を施す。106は肥前系陶器の大皿または鉢、107は備前焼の擂鉢である。108は土師器皿で、手づくね成形である。

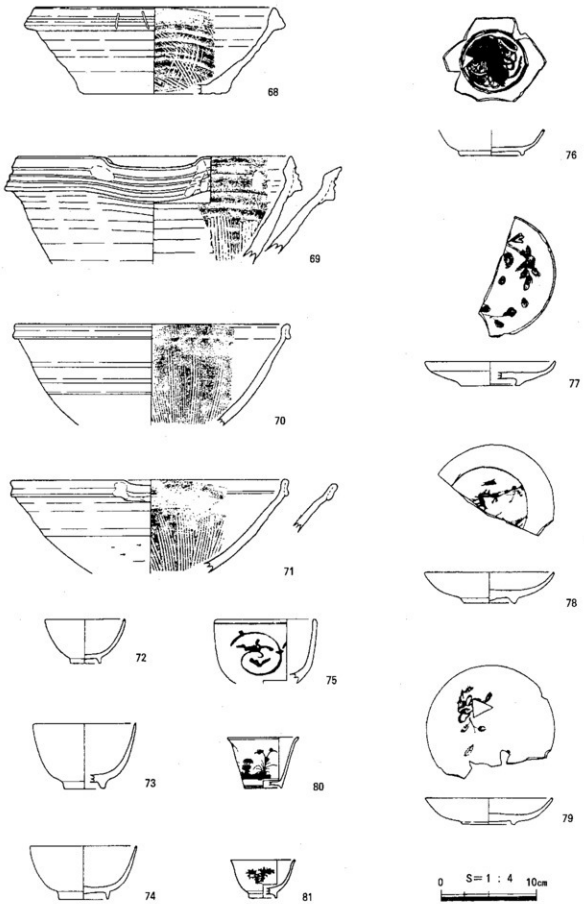
ＳＤ－19は両端をＳＤ－17とＳＤ－18によって切られているが、現状で長さ3.7ｍにわたって検出し、幅0.8～0.9ｍ、深さ0.1ｍをはかる。主軸はＮ－28°－Ｅである。

ＳＤ－19からは肥前系磁器の小坏（109）が出土した。

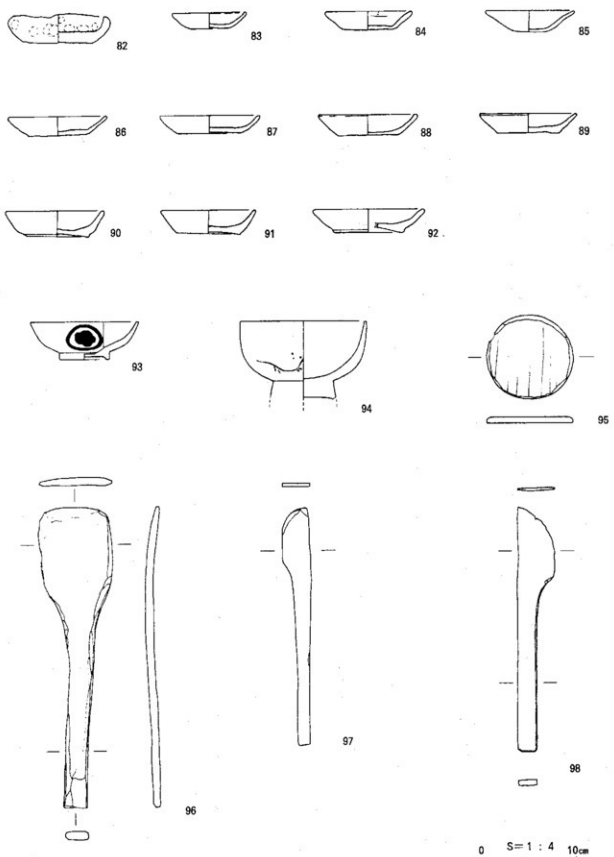
ＳＤ－20は南西側が調査区外にのび、北東側はＳＤ－17によって切られているが、現状で長さ7.3ｍにわたって検出し、幅2.2～3.4ｍ、深さ0.2ｍをはかる。主軸はＮ－36°－Ｅである。



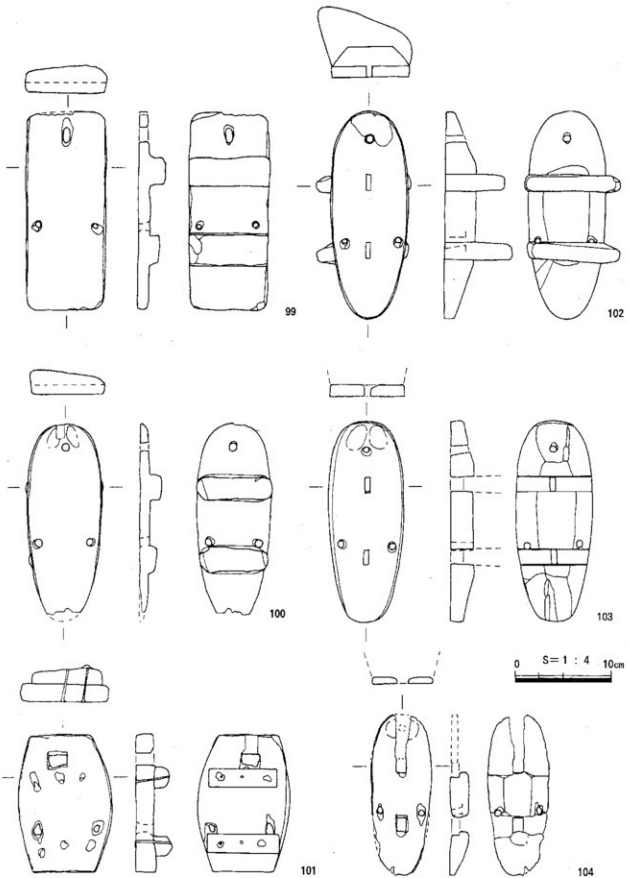
第10図　ＳＤ－16・17出土遺物実測図



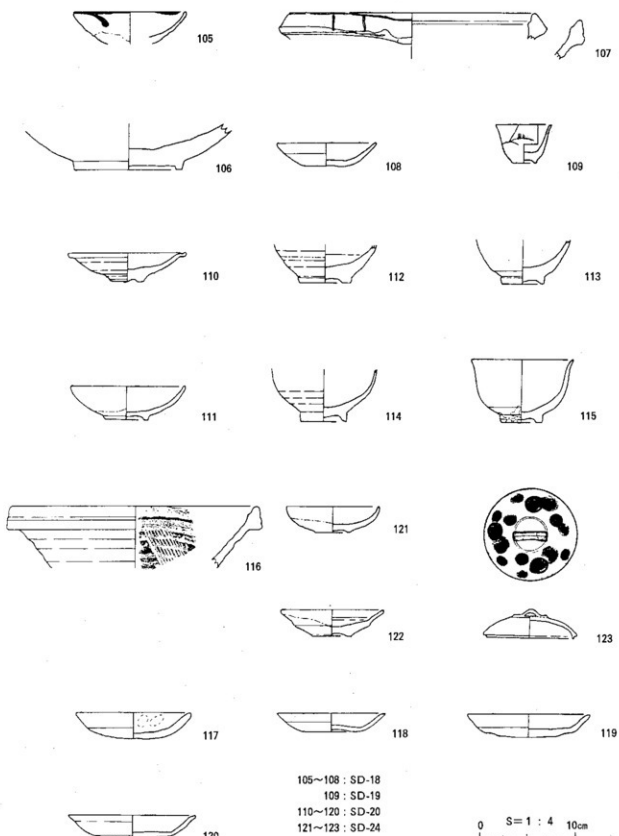
第11図　ＳＤ－17出土遺物実測図（１）



第12図　ＳＤ－17出土遺物実測図（２）



第13図　ＳＤ－17出土遺物実測図（３）



第14図　ＳＤ－18・19・20・24出土遺物実測図

ＳＤ－20からは肥前系陶器、肥前系磁器、備前焼、土師器皿、瓦が出土した。

110、111は肥前系陶器の皿である。110は胎土目をもつ溝縁皿である。111は目跡が認められず、口縁に鉄絵装飾を施す。112～115は肥前系陶器の碗で、114は高台内まで釉がかかる。116は備前焼の擂鉢である。117～120は土師器皿で、手づくね成形である。

4．建物跡（第15図）

ＳＢ－01は礎石建物跡で、桁行４間、梁行２間分を検出した。柱間は1.9～2.7ｍをはかり、礎石は失われたものがあるが、35～40㎝大の石を用いている。ＳＢ－01の南側には２石が認められ、大きさも25～30㎝と建物の礎石よりも小さく、建物の南面に付属する庇あるいは縁側のような施設が考えられる。主軸はＮ－68°－Ｗで、時期はＳＤ－06を切っていることから、18世紀後半～19世紀前半以降のものであると考えられる。

5．柵　列

ＳＡ－01（第16図）

調査区の南西隅で一直線に並ぶ20～40㎝大の上面が平坦な石を４石確認した。石２と石３の距離は70㎝、石１と石２の距離は225㎝、石３と石４の距離は155㎝で、石１と石２の間に２石、石２と石４の間に１石が失われているものと思われ、石間は70～78㎝をはかるもの思われる。石の上面の海抜は南西側の石２～４は－0.03～0.00ｍとほぼ同じであるが、石１は土圧等により少し沈み込んでおり、－0.13～－0.08ｍとなっている。主軸はＮ－26°－Ｅである。

ＳＡ－02（第16図）

ＳＡ－02は３間分を検出した。柱間はＰ－16～Ｐ－25間が3.6ｍ、Ｐ－25～Ｐ－27間とＰ－27～Ｐ－28間が3.1ｍで、主軸はＮ－58°－Ｗである。

6．埋設桶

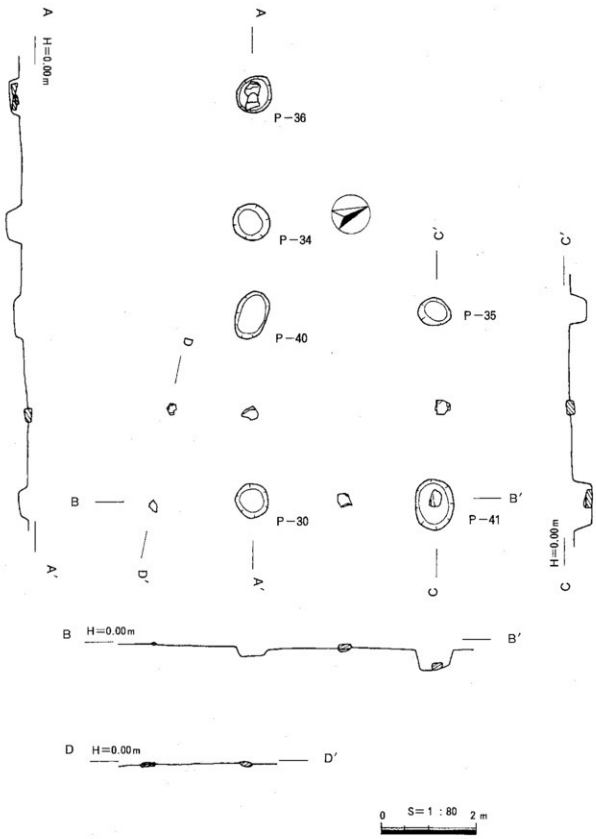
埋設桶は２基検出した。いずれも上部が削平され、下部がわずかに残っているのみである。これらは埋設桶２が第１層で検出されたことと、埋設桶１の残存状況とその推定高から考えられる掘り込み面から、幕末～明治以降まで時期が下る可能性がある。

埋設桶１（第16図）

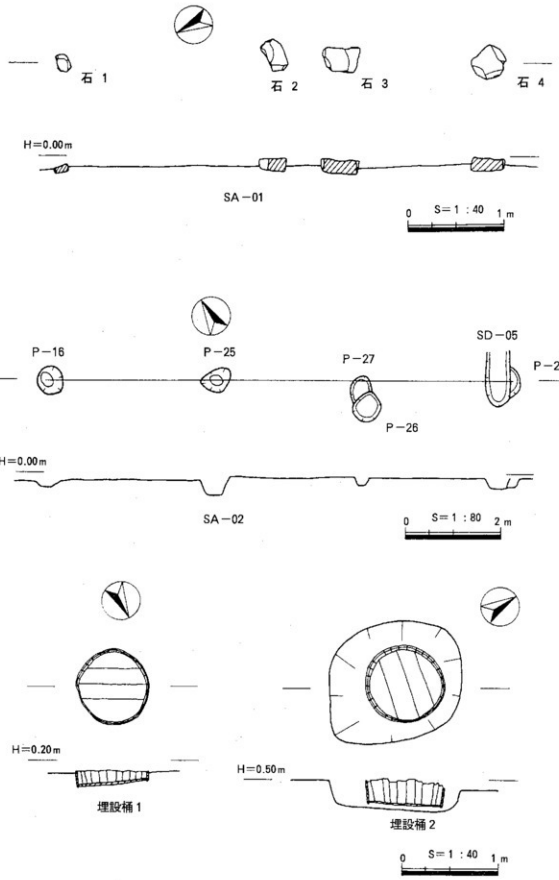
埋設桶１は掘方を確認できなかったが、径70～80㎝、残存高10～15㎝をはかる。底面の海抜は－0.06～0.01ｍである。底板は幅16～25㎝、厚さ２㎝の４枚の板を用い、側板は幅６～10㎝、厚さ２㎝の31枚の板を用いている。

埋設桶２（第16図）

埋設桶２は長軸1.4ｍ、短軸1.3ｍ、深さ25㎝をはかる平面隅丸方形状の掘方内にあり、径75㎝、残存高25㎝をはかる。底面の海抜は0.24～0.28ｍである。底板は幅16～21㎝、厚さ２㎝の４枚の板を用い、側板は幅５～15㎝、厚さ２㎝の26枚の板を用いている。



第15図　ＳＢ−01遺構図



第16図　ＳＡ－01・02、埋設桶１・２遺構図

第3節　遺構外出土遺物

1．弥生時代の遺物（第17、18図）

弥生時代の遺物は第4層の遺物包含層と第5層の洪水堆積層から出土した。時期は弥生時代中期中葉のものである。

124～136は壺である。124～129は櫛描きあるいは刺突文によって装飾を施した壺の肩部で、124、126の外面には櫛描きの平行線、斜格子文、刺突文、125の外面には櫛描きの平行線と斜格子文、127～129の外面には刺突文がある。調整は127、129は摩滅のため不明であるが、128の内面はハケ調整の後、ナデ調整を行っている以外はいずれも内外面ともハケ調整を行っている。130～134は口縁端部を垂下させたもので、130、134の端部には刻目、131の端部には刺突文、133の端部外面には櫛描きの斜格子文、内面には櫛描きの斜格子文と刺突文がある。135は口縁端部が肥厚して面をもつもので、口縁端部には刻目があり、口縁外面には刻目突帯が巡る。136は135と同型の壺の頸部で、2段の刻目突帯が巡る。

137～144は甕である。137～139は口縁が「く」字に外反するもので、口縁端部をわずかにつまみ上げる。140 は口縁が「く」字に外反し、端部にわずかにくぼむ平坦な面をもつ。141は口縁が大きく外反し、口縁端部をつまみ上げる。142～144は口縁が「く」字に外反し、端部は拡張し、幅の広い面をもつ。143、144は口縁端部に刻目がある。

145は鉢で、口縁端部が内側に肥厚し、上部に平坦面をもつ。底部には穿孔がある。

146～150は底部で、146は内外面に漆を塗布している。

2．古墳時代の遺物（第18図）

古墳時代の遺物は第4層の遺物包含層から出土した。出土量は少なく、時期は6世紀後半のものである。

151～153は須恵器である。151、152は坏蓋で、151は天井部と口縁部との境は沈線によって鈍い稜をつくり出し、口縁端部は丸くおさまるが、内面に1条の沈線が巡る。152は天井部と口縁部との境に2条の沈線が巡り、端部は丸くおさまる。153は坏身で、口縁の立上がりは低い。これらはいずれも陶邑のＴＫ43に比定できるものと思われる。

154は円筒埴輪で、突帯は断面台形を呈し、突帯下にはヘラ記号ある。外面はナナメ方向のハケ調整であるが、内面は摩滅のため、調整は不明である。川西編年のⅤ期に属するものである。

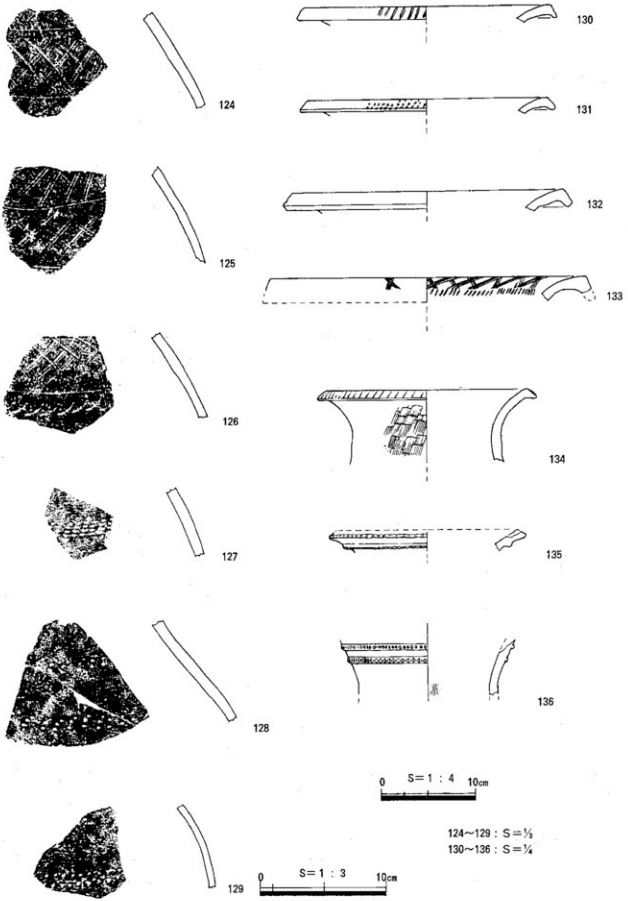
3．古代～中世の遺物（第18図）

古代～中世の遺物は第4層の遺物包含層から出土した。古代の遺物は図示していないが、返りをもつ坏蓋1点、底部に回転糸切痕をもつ坏身1点、高台をもち、底部に糸切痕をもつ坏身1点がある。

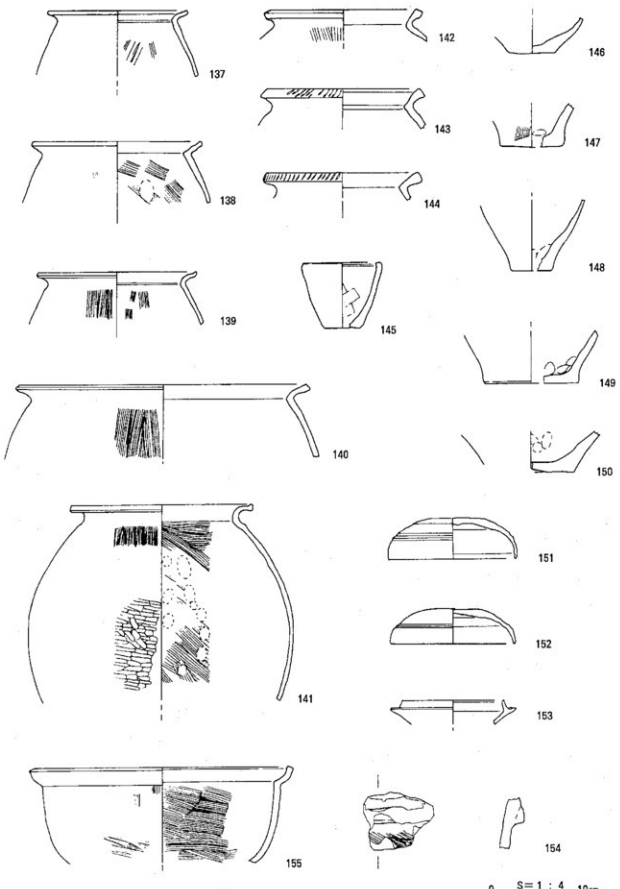
中世の遺物は土釜（155）の他、中世後期に属するものが数点認められる。155は受け口状の口縁をもつ土釜で、内外面にハケ調整を行っている。時期は12・13世紀である。

4．近世の遺物

近世の遺物は第1層の整地層と第2、3層の遺物包含層から出土した。このうち、ここでは第2、3層から出土した遺物を図示し、報告する。第2、3層には江戸時代前期の遺物がわずかに認められるが、主体となるのは江戸時代後期以降のものである。



第17図　遺構外出土遺物（弥生土器）実測図



第18図　遺構外出土遺物（弥生土器・須恵器・埴輪・土釜）実測図

陶　器（第19、20図）

156は朝鮮系陶器で、見込みと高台畳付に砂目がある。157～167は肥前系陶器の皿である。157、158は胎土目、159～161は砂目である。160は高台畳付にも砂目があり、161は高台内に砂が付着する。162～165は目跡が認められない。163は高台内まで施釉され、高台内に砂が付着する。165は口縁に鉄絵装飾を施している。166、167は見込みに蛇ノ目釉剥ぎを行っている。168～173は肥前系陶器の碗である。168は小型の碗で、見込みに胎土目がある。169～173はいずれも内湾しながら立ち上がるが、172、173はわずかに口縁が外反する。174は瀬戸・美濃系陶器の碗、175～179は在地系陶器の碗である。180～185は擂鉢で、180、181は備前焼、182～184は須佐唐津焼、185は産地不明である。

磁　器（第21～23図）

186は中国系磁器の碗である。187～201は肥前系磁器の碗である。187、188は陶胎染付で、187の外面には一重網目文を描く。189～191はコンニャク印判を施したもので、191は手描きの雲気文にコンニャク印判で桐の葉を表現している。高台内には「泉」銘がある。192～195は見込み及び高台内に銘をもつもので、192は見込みと高台内に「大明成化年製」銘、193は「宣明化製」銘、194は「宣明」銘があり、195はかなり崩した字で「大明年製」と書かれているものと思われる。199は広東碗、200、201は外青磁の碗である。200は筒型の碗で、見込みに手描きによる五弁花文、高台内に銘がある。201は見込みに手描きによる五弁花文、高台内に「渦福」銘がある。202～209は肥前系磁器の皿である。202、203は高台径が小さいもので、202は高台畳付に砂が付着し、203は高台を削り取っている。204～206は高台径が大きいもので、205は口縁が外反し、206は見込みに蛇ノ目釉剥ぎを行っている。208は型押し成形によって花弁を型どったもので、蛇ノ目凹形高台である。209は大皿で、高台畳付に砂が付着する。210、211は肥前系磁器の鉢である。210は直立気味に立上がり、211は口縁が外反し、蛇ノ目凹形高台である。212～216は肥前系磁器の小坏である。212は白磁で、外傾して立ち上がるそば猪口に形態が近いものである。213～216は口縁が外反するものである。217は肥前系磁器のそば猪口で、口縁に口紅装飾を施す。218～221は肥前系磁器の紅皿である。218は型押し成形によって貝の紋様を型どったものである。219は外面に雨降文を描く。222～224は肥前系磁器の蓋である。222、223は環状のつまみがつき、口縁には返りをもたない。224は棒状のつまみがつき、口縁に返りをもつ。222は外青磁で内面に手描きによる五弁花文、つまみ内に「渦福」銘がある。225～227は肥前系磁器の仏飯器、228～232は肥前系磁器の瓶である。229は油壺、231は小型の瓶で、細長い頸がつくものと思われる。231、232は外面に蛸唐草文を描く。

土　器（第24図）

233～ 241は土師器皿である。233～235は手づくね成形、236～241はロクロ成形を行っており、236～238、240、241の底部には回転糸切痕があり、239の底部には静止糸切痕がある。240、241は油溜めがつくものである。242、243は焙烙で、いずれも把手をもつ。

石 製 品（第24図）

244、245は石製品で、244は砥石、245は黒色の碁石である。

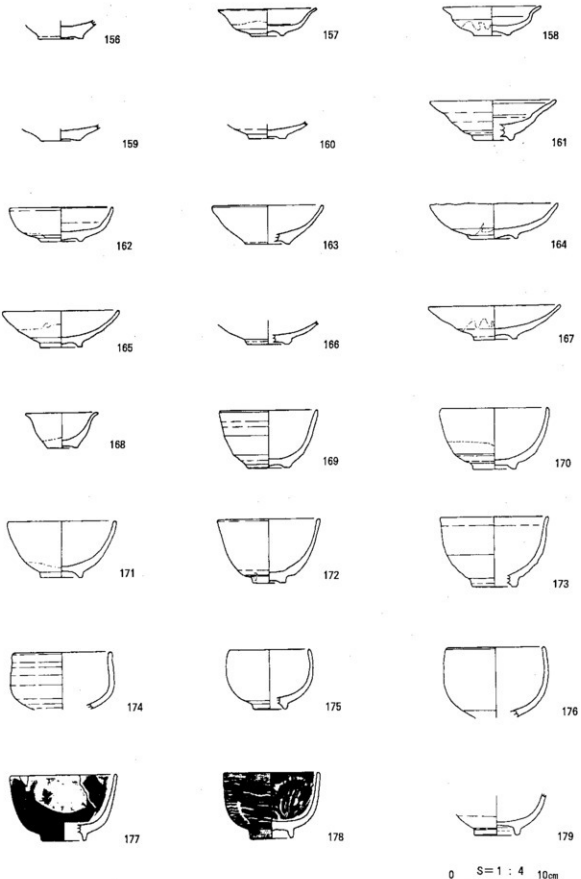
金属製品（第25図）

246～264は金属製品である。246～248は煙管、249は釣針状製品、250、251は鉤状製品である。250は断面円形を呈し、上端の背部に切り込みがある。251は偏平なもので、上端には孔があり、側面には花弁の押印がある。252、253は棒状製品で、252は上側が断面六角形を呈し、下端に向かっ

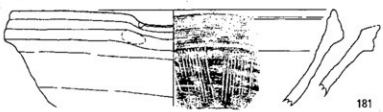
て丸みを帯びる。253は断面円形である。252、253とも上端に擬宝珠形の頭部をもつ。254～264は古銭で、254は皇宋通宝（1039年初鋳）、255は熙寧元宝（1068年初鋳）、256は元豊通宝（1078年初鋳）、257は永楽通宝（1408年初鋳）、258～264は寛永通宝である。

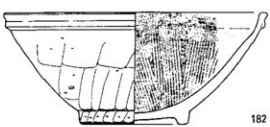
木製品（第26～28図）

265～268は漆塗椀である。265は内外面とも黒色、266は内面赤色、外面黒色で、外面には紋様を描く。267、268は高台が高く、いずれも内面赤色、外面黒色である。268の外面には紋様を描く。269～271は一木連歯下駄で、269は台部が長方形を呈する。270、271は台部が小判形を呈し、歯は台部よりも大きく広がり、断面台形を呈する。272～277は構造下駄である。272は陰卯下駄、273～277は露卯下駄で、273はホゾ穴が正方形を呈し、274～277はホゾ穴が長方形を呈する。278、279は櫛である。280は傘のロクロで、骨をとめる溝があり、中心には傘の軸を差し込むための孔がある。281は栓、282は箸、283は鍬である。鍬はＳＤ－16からも出土している。284はヘラ状製品、285～287は曲物の底板である。286は１ヶ所に桜の皮があり、287には桜の皮は残存していないが、４ヶ所に孔がある。

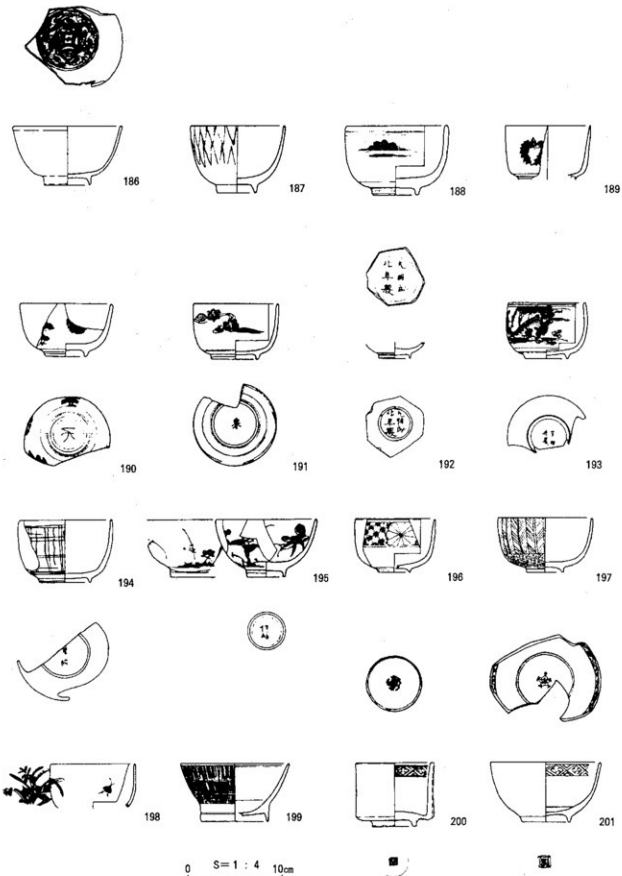


第19図　遺構外出土遺物（陶器）実測図（１）

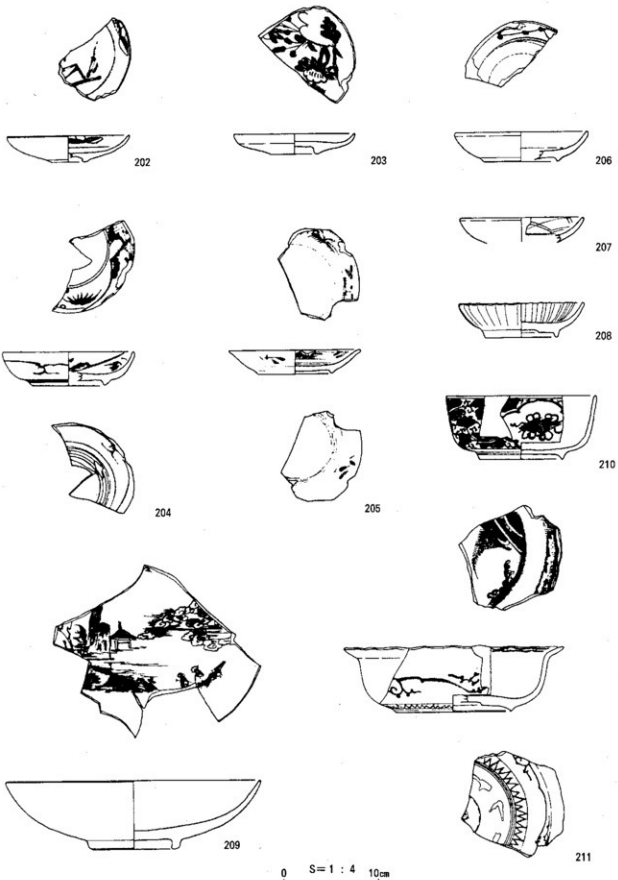




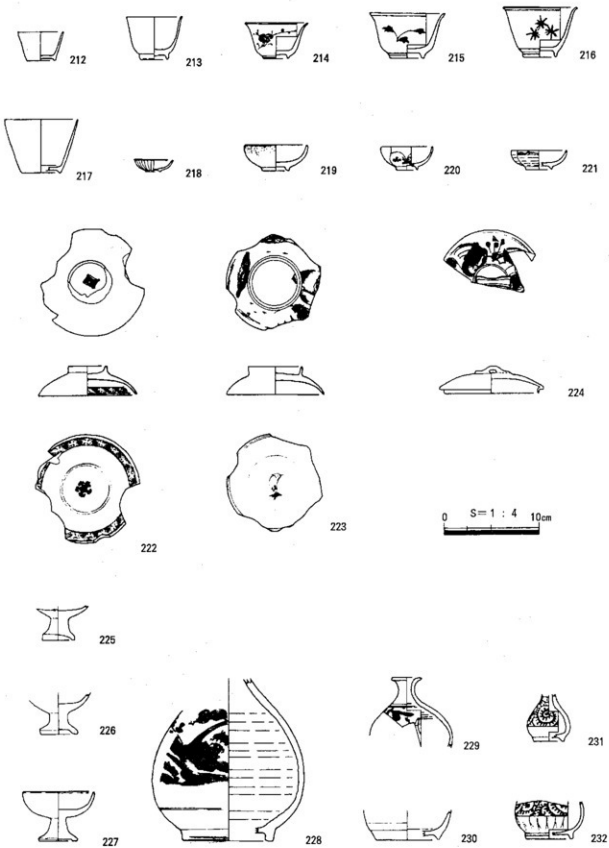
第20図　遺構外出土遺物（陶器）実測図（２）



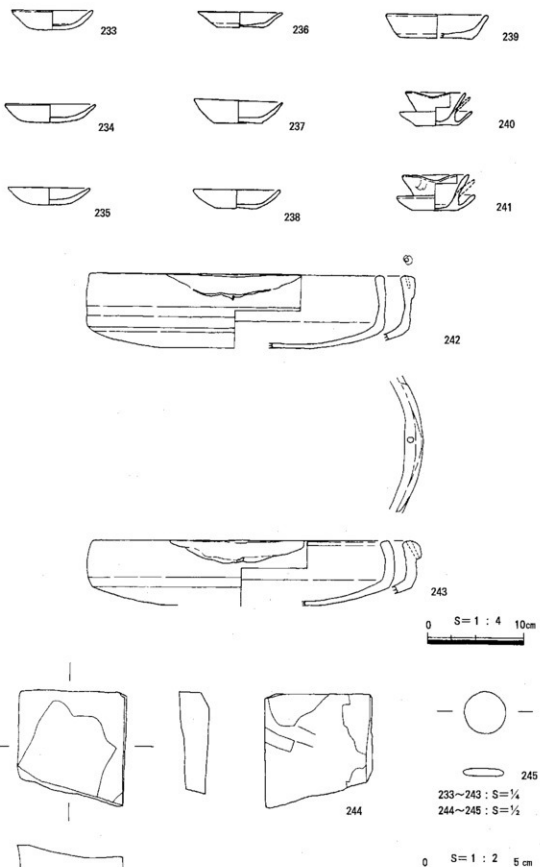
第21図　遺構外出土遺物（磁器）実測図（1）



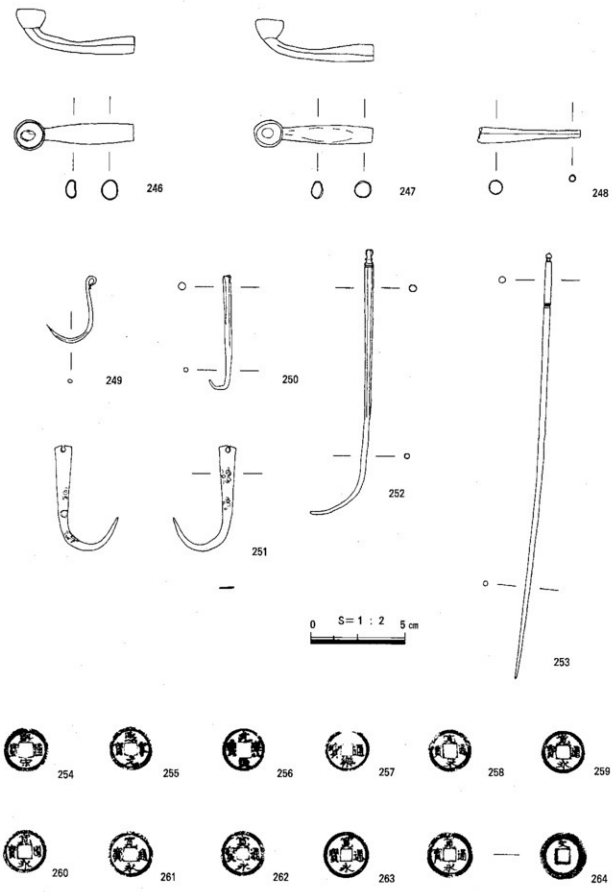
第22図　遺構外出土遺物（磁器）実測図（２）



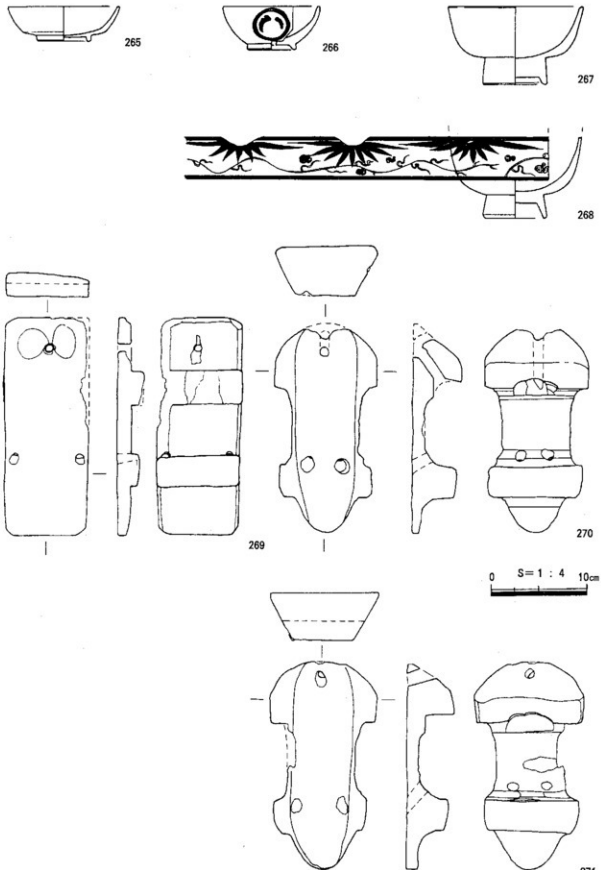
第23図　遺構外出土遺物（磁器）実測図（３）



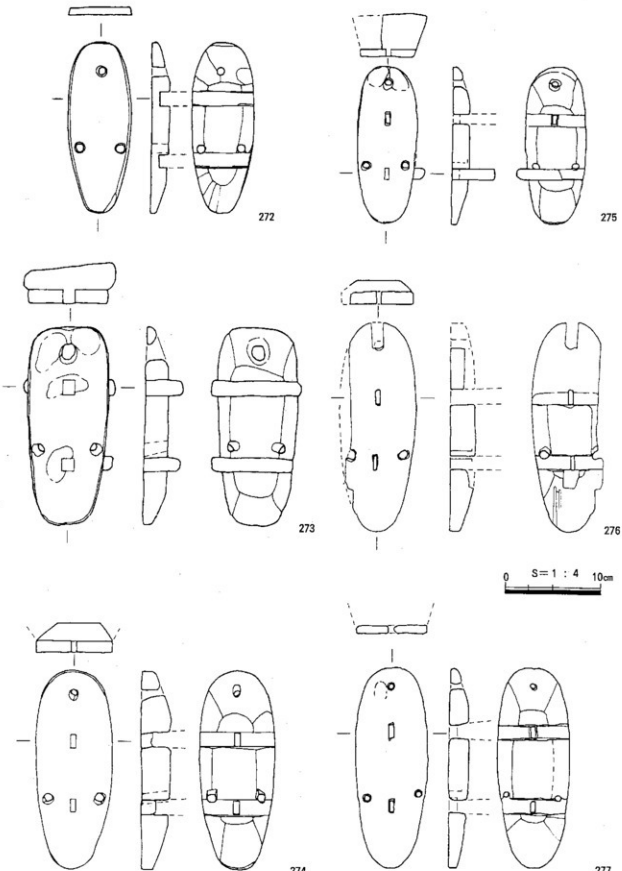
第24図　遺構外出土遺物（土器・石製品）実測図



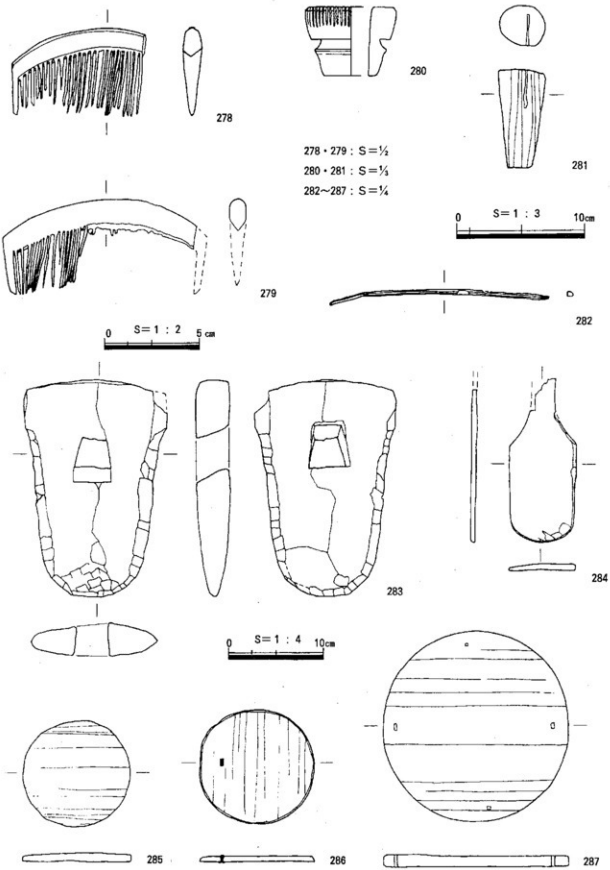
第25図　遺構外出土遺物（金属製品）実測図



第26図　遺構外出土遺物（木製品）実測図（１）



第27図　遺構外出土遺物（木製品）実測図（２）



第28図　遺構外出土遺物（木製品）実測図（３）

第4章　まとめ

今回の調査では屋敷の境界を示すと思われる溝を検出した。このような溝については米子城跡の各遺跡でも確認されており、米子城下町全域で普遍的にみられるものである。また、江戸時代に書かれた城下町の絵図が数枚伝わっており、その中に年号と居住者の人名が記入されたものがあり、今回の調査成果と併せてみてみると当遺跡では16世紀末～17世紀前半、17世紀後半～18世紀前半、18世紀後半～19世紀前半、幕末～明治初頭の４時期に大まかに分けられる。本章では各時期毎に屋敷地の変遷をみてみたい。

16世紀末～17世紀前半

この時期は吉川氏、中村氏、加藤氏、池田氏による城下町整備の時期に相当し、寛永９年（1632年）からは鳥取藩池田氏の家老荒尾氏が米子城を預かり、自分手政治を行うようになる。

この時期のものにはＳＤ－01～03・15～20・24～26があり、これらによって調査地は４件の屋敷にまたがるものと思われる。しかし、この時期の人名が記入された絵図が存在しないため、居住者については不明である。ＳＤ－15～17・24は幕末～明治初頭まで存続するが、ＳＤ－01～03・25・26・18～20はこの時期に廃絶する。

この時期の遺物は溝によって区画された屋敷内からはほとんど出土しておらず、大部分がこれらの溝から廃棄された状態で出土してしている。

17世紀後半～18世紀前半

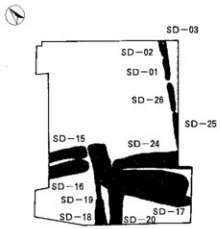
この時期の遺物ははとんど認められない。このような状況は米子城跡の各遺跡でも認められ、その背景には寛永９年（1632年）に荒尾氏が米子城を預かってからは、禄高の減少に伴ってそれまで在住していた武士は浪人あるいは新しい主君に仕官したため、在住する武士の数が減り、城下では空き家・空き地が目立つようになり、その結果、寛文13年（1673年）には明屋敷（空屋敷）の処分が許可されたことと関係があるものと思われる。この時期の遺物がほとんど認められないという状況は当遺跡でも屋敷が空き家となり、その後、廃棄処分された可能性があり、屋敷境界溝に16世紀末～17世紀前半の遺物が大量に廃棄された状態で出土したのはこのような背景によるものであると思われる。

この時期には「伯耆国米子平図」（宝永６年　1709年）と「湊山金城米子新府」（享保５年　1720年）という絵図があり、調査地は金万平右衛門と戸田弥惣の屋敷となっているものと思われ、この２件の屋敷はＳＤ－15・16とＳＤ－17・24のほぼ平行する２重の溝によって屋敷が区切られているものと思われる。これらの溝からはこの時期の遺物がほとんど認められないが、堆積状況と上層から江戸時代後半の遺物が出土していることから、この時期にもこれらの溝が存続していた可能性が高い。

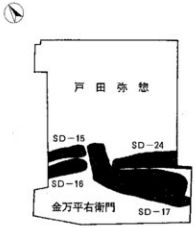
18世紀後半～19世紀前半

この時期になると出土遺物の量が急激に増え、屋敷内からも大量の遺物が出土している。今回検出した遺構の大部分がこの時期に属するものと思われる。

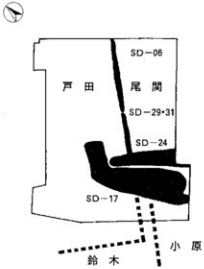
この時期には「米子御城下図」（明和６年　1769年）という絵図があり、これには居住者の人名と各屋敷の間口と奥行の長さが記されている。当調査地は戸田、尾関、鈴木、小原の４件の屋敷にあたるものと思われる。このなかで、戸田の屋敷は間口19間（34.5ｍ）、奥行30間（54.5ｍ）とあり、



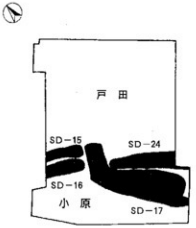
16世紀末～17世紀前半



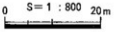
17世紀後半～18世紀前半



18世紀後半～19世紀前半



幕　末～明治初頭



第29図　屋敷地変遷図

当時の道を踏襲したものと思われる調査地の北西の現在の道路から換算すると戸田と尾関の屋敷の境界はＳＤ－06・29・31とほぼ一致する。また、戸田と鈴木の屋敷の境界は同じく当時の道を踏襲したものと思われる調査地の北東の現在の道路から換算すると調査区南西側の調査区外に位置するものと思われ、16世紀末～17世紀前半まで屋敷境界として用いられたＳＤ－15・16についてはこの時期にも存続するが、この時点では屋敷境界としての意識は薄れ、単なる水路として戸田の屋敷内に取り込まれる。また、尾関の屋敷は間口32間（58.2m）、奥行16間（29.1m）とあり、調査地北東の現在の道路から換算すると尾関と小原の屋敷の境界はＳＤ－24とほぼ一致し、これとほぼ平行するＳＤ－17の二重の溝によって尾関と小原の屋敷の境界を示す可能性がある。また、尾関の屋敷とその隣の畑との境界は戸田と尾関の屋敷の境界から換算すると現在の裁判所とその隣の敷地との境界あたりに位置するものと思われる。鈴木と小原の屋敷の境界については絵図から想定される位置には溝や垣根、生け垣のような施設は認められなかった。

ＳＤ－04・05・12・14・27・28はこの時期に属するもので、これらは明和６年（1769年）を前後する時期の屋敷の境界溝あるいは屋敷内を区画する溝ではないかと思われる。

ＳＥ－04・08・09・11・13もこの時期に属するもので、この他の井戸は遺物が出土していないため、時期は不明であるが、ＳＥ－06以外の大部分はこの時期に属するものと思われる。井戸は戸田の屋敷に集中して分布しており、屋敷の境界付近に位置するものが多い。

幕末～明治初頭

幕末～明治初頭にはＳＤ－15～17・24があり、「米子城市図」（安政年間　1854～59年）と「米子町田畑御改宗旨地續総計」（明治３年　1870年）という絵図とあわせてみてみると、調査地はＳＤ－15・16とＳＤ－17・24のほぼ平行する２重の溝によって戸田と小原の屋敷に区切られているものと思われる。戸田の屋敷は明和６年（1769年）の絵図の屋敷と比べるとＳＤ－15～17・24のところまで奥行が狭くなる一方、間口は広がり、尾関との境界は調査区の南東側の調査区外あたりに位置するものと思われる。

埋設桶１・２はこの時期に属するものと思われ、ＳＢ－01もＳＤ－06・28を切っていることからこの時期に属する可能性があるが、建物の主軸が屋敷地の方向とはずれているのでさらなる検討が必要である。

明治10年（1877年）には整地がなされ、米子区裁判所が開設される。

第5章　自然科学的分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．米子城跡第25次調査における植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

ここでは、米子城跡第25次調査において採取された試料について植物珪酸体分析を行い、農耕を含めた土地利用について検討を行う。

2．試　料

試料が採取されたのは、3区南東壁断面である。分析試料は灰褐色砂質土（試料1）、褐色砂および暗灰色砂質土（試料2）、灰茶褐色粘質土、灰色粘質土、暗灰色砂質土、褐灰色細粒砂の混合層（試料3）の3点である。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

1）試料土の絶乾（105℃・24時間）
2）試料土約1ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02ｇ）
　※電子分析天秤により1万分の1ｇの精度で秤量
3）電気炉灰化法による脱有機物処理
4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来する植物珪酸体（以下、植物珪酸体と略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1ｇ中の植物珪酸体個数（試料1ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）を乗じて、単位面積で層厚1㎝あたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネ（赤米）は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4．分析結果

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネ、ヨシ属、シバ属、ウシクサ族（ススキ属型）、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）の植物珪酸体が同定された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。なお、主要な分類群については図版17、18に顕微鏡写真を示した。

5．考　察

（1）農耕の可能性について

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）およびモロコシ属（モロコシが含まれる）などがある。本遺跡では、分析を行った3試料すべてからイネの植物珪酸体が検出された。このうち、試料1では植物珪酸体密度が7,200個／gと高い値であることから、本試料が採取された層準については稲作跡である可能性が高いと考えられる。試料2が採取された地点は大畔状の盛り土である。ここでは、1,200個／gと低い密度であるがイネの植物珪酸体が検出されていることから、何らかの稲作遺構である可能性が考えられる。堆積状況から判断するならば、水田の大畔あるいは畠の畝の可能性が考えられる。試料3では、植物珪酸体密度が4,900個／gと高い値であり、通常であれば稲作跡と判断される検出量である。ただし、堆積状況からみてここが水田であったとは考えにくいことから、畠の畝あるいは他所の耕作土がここに盛り土されたものである可能性が考えられる。

イネ以外では栽培作物の植物珪酸体は検出されていないことから、他のイネ科の作物が栽培された痕跡は認められない。ただし、イネ科植物の中には未検討のものもあるため、未分類としたものの中に栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、植物珪酸体分析で同定が可能なものは多くがイネ科の草本植物であることから、マメ類、イモ類および野菜類などは分析の対象外である

（2）植物珪酸体分析から推定される植生・環境

ススキ属やタケ亜科植物は比較的乾燥した土壌環境を好むのに対し、ヨシ属は湿地的環境に生育する。このことから、これらの植物の出現状況から堆積当時の乾湿環境を推定することが可能である。本遺跡では、試料1と試料3でタケ亜科とススキ属型が高い密度である。したがって、これら各層の堆積時は調査区一帯は比較的乾いた環境であったと推定される。

6．小　結

米子城跡第25次調査において採取された試料について植物珪酸体分析を行い、稲作跡の検討および堆積環境の推定を試みた。その結果、試料1の採取された層準については稲作跡である可能性が高いと判断された。また、試料2と試料3の採取された地点については稲作に伴う遺構（大畔あるいは畠の畝）である可能性が推定された。なお、試料1と試料3の堆積時は概ね乾いた環境であったと考えられた。

≪参考文献≫

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追及のための基礎資料として－，考古学と自然科学，20：81－92.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－，考古学と自然科学，9：15－29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定－，考古学と自然科学，12：29 －41.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－，考古学と自然科学，17：73－85.

表1　米子城跡第25次調査の植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）	試料	3区南東壁 1	2	3
イネ科	Gramineae (Grasses)			
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	*72*	*12*	*49*
ヨシ属	*Phragmites*	*7*		*6*
シバ属	*Zoisia*	*7*		
ススキ属型	*Miscanthus* type	*33*	*6*	*24*
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	*150*	*6*	*73*
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	*65*	*6*	*37*
その他	Others	*59*	*6*	*31*
未分類等	Unknown	*631*	*95*	*415*
プラント・オパール総数		*1022*	*131*	*634*

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	*2.10*	*0.35*	*1.43*
ヨシ属	*Phragmites*	*0.41*		*0.38*
ススキ属型	*Miscanthus* type	*0.40*	*0.07*	*0.30*
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	*0.72*	*0.03*	*0.35*
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	*0.49*	*0.04*	*0.27*

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

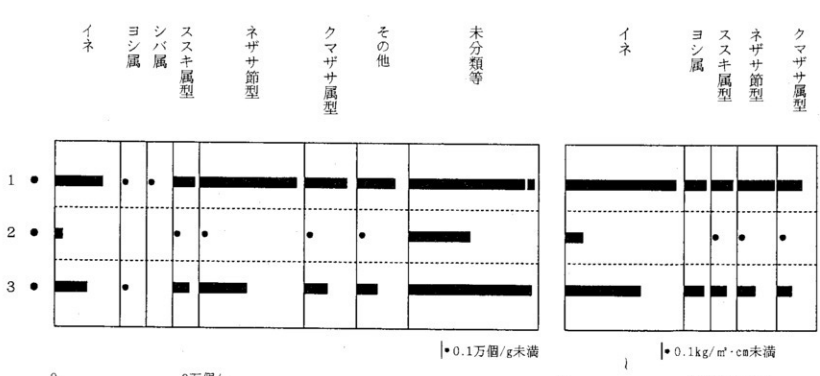


図1　3区南東壁の植物珪酸体分析結果
※主な分類群について表示。

Ⅱ．米子城跡第25次調査における花粉分析・寄生虫卵分析

1．はじめに

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は、分解されにくく堆積物中に比較的良好に保存される。花粉は、風媒花植物であれば空中に飛散し、虫媒花植物ならば昆虫により運搬され、多くの場合、地表に落下後土壌中あるいは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。花粉分析では、堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から地層の対比を行ったり、植生や土地条件などの古環境や古気候の推定が行われる。一般には、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境の復元に用いられるが、考古遺跡では、堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。一方、人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は強靭にできており、堆積物中に比較的良好に残存する。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度は高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と容易に識別することができ、トイレ遺構を確認することも可能である。また、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることができる。ただし、近年になって研究されだした分野であるため、分析例はまだ少ない。

米子城跡第25次調査の調査地点は、江戸時代の武家屋敷の裏庭と推定された。そこで、畑の畝あるいは庭の可能性のある地点および屋敷の境界を示す溝（ＳＤ－24）の堆積物を対象として花粉分析、寄生虫卵分析を行い、植生、環境、遺構の性格について検討を行った。

2．方　法

（1）花粉分析

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm・２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）、中村（1980）および所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

イネ属に関しては中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（2）寄生虫卵分析

寄生虫卵の検出には、金原・金原（1992）を参考して、以下の物理化学処理を施して行った。

1）堆積物（試料）1ccを採量し、脱イオン水を加え撹拌する。

2）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。

3）25%フッ化水素酸を加え、2・3度混和しつつ、30分間静置する。

4）遠心分離器によって水洗後、残渣を2分する。

5）片方にアセトリス処理を施す。

6）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入し、それぞれ標本を作製する。

7）生物顕微鏡下で直線視野法によって検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は1500rpm・2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

3．試　料

試料は、3区南東壁において試料1～5、3区南西壁において試料6・7の計7点が採取された。なお、試料1～3の採取された部分は人為的な盛土で、畑の畝あるいは庭（築山など）の可能性が考えられていた。また、試料4～7は、動植物遺体や生活用品の廃棄されていた屋敷と屋敷の境界を示す溝ＳＤ－24の堆積物である。

4．結　果

（1）花粉分析

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉38、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉28、シダ植物胞子3形態の計72である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を図版19に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、センダン属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、グミ属、カキ属、ハイノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、ツツジ科、ニワトコ属－ガマズミ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ノブドウ、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ナス科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

2）花粉群集の特徴

試料1～3は、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、イネ属型を含むイネ科が優占する。

草本花粉では他にカヤツリグサ科、ヨモギ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、ソバ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属、スギなどが低率に出現する。

試料4～7（SD－24）では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、イネ属型を含むイネ科が優占する。草本花粉では他にヨモギ属、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科、チドメグサ亜科、ソバ属などが伴われる。樹木花粉はやや低率であるが、ニワトコ属－ガマズミ属とモクセイ科が特徴的に多く、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属の出現率もやや高い。試料4からはカキ属が出現している。

（2）寄生虫卵分析

寄生虫卵は、試料1、3、4、5、7から低密度ながら回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、異形吸虫卵、マンソン裂頭条虫卵が検出された。分析結果を表2に示す。

5．考　察

（1）畝状部（試料1、2、3）の植生、環境、遺構の性格

イネ科を主にカヤツリグサ科、ヨモギ属、アブラナ科、チドメグサ亜科などが生育していたと推定される。イネ科とカヤツリグサ科は多様な環境に生育する種類を含むが、ヨモギ属、アブラナ科、チドメグサ亜科はやや乾燥した集落周辺や耕地の雑草であり、周辺がやや乾燥した人為環境であったことが示唆される。イネ属型とソバ属が伴われることから、試料採取地点か周囲で水田ないし畑が営まれていたと考えられる。なお、花粉分析では畝状部が明らかに畑であったとは断定できない。

樹木はカシ類（コナラ属アカガシ亜属）、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、ニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属、アカマツかクロマツ）、スギなどが周囲に孤立木としてかやや遠方で林として分布していたと考えられる。

寄生虫卵は試料1と試料3から検出されたが低密度であり、人の生活範囲内の汚染程度である。

（2）SD－24（試料4～7）の植生、環境、遺構の性格

SD－24の周囲には、イネ科を主にヨモギ属、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科、チドメグサ亜科などが生育し、やや乾燥した環境が分布していたと推定される。イネ属型とソバ属が伴われることから、周辺で水田と畑が営まれていたと考えられる。

樹木はニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属、アカマツかクロマツ）、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、スギなどが周囲に孤立木としてかやや遠方で林として分布していたと考えられる。なお、特徴的なことはニワトコ属－ガマズミ属とモクセイ科が多いことであり、SD－24の周囲に生育していたとみなされる。SD－24が屋敷の境界を示す溝であることから、その周囲に生垣状に植えられていた可能性がもたれる。

寄生虫卵は試料4、5、7から低密度で検出されたが、人が生活する周囲の汚染程度であり、SD－24に汚物が流されていたとはみなされない。生活排水が流されていたかどうかは珪藻分析を行ってみなければわからない。

6．まとめ

米子城跡第25次調査の花粉分析の結果、周囲はイネ科を主にヨモギ属、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科、チドメグサ亜科などが生育し、やや乾燥した環境が分布し、周辺では水田と畑が営まれたと推定される。樹木はカシ類（コナラ属アカガシ亜属）、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、ニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属、アカマツかクロマツ）、スギが周辺に孤立木として生育するかやや遠方で林として分布していたと考えられた。畝条部（試料1、2、3）の性格は畑の可能性もあるが特定できない。SD－24の周囲にはモクセイ科やニワトコ属－ガマズミ属の樹木が生育していたと

みられる。ＳＤ－24から寄生虫卵が検出されたが低密度であることから、人が生活する範囲内の汚染とみなされ、汚物が流れていたかどうかは明確ではない。

≪参考文献≫

中村純（1973）花粉分析．古今書院，Ｐ．82－110．

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，Ｐ．248－262．

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，Ｐ．60．

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，Ｐ．91．

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，Ｐ．187－193．

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，Ｐ．21－30．

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen nd Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science,19，Ｐ．231－245．

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，Ｐ．14－15．

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物・医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，Ｐ．９－55．

表1　米子城跡第25次調査における花粉分析結果

分類群		試料						
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7
Arboreal pollen	樹木花粉							
Podocarpus	マキ属		1		1			
Abies	モミ属	1	5	2	1	1	1	
Tsuga	ツガ属		1	2		1		
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	11	29	17	38	16	28	24
Pinus subgen. Haploxylon	マツ属単維管束亜属			1		1		
Cryptomeria japonica	スギ	8	19	17	8	9	11	15
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ			1				
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		7	1			1	1
Salix	ヤナギ属	1	6		2			
Myrica	ヤマモモ属				1			
Juglans	クルミ属		1					
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1	1	1	2			2
Alnus	ハンノキ属	3	2	1	4	1	1	5
Betula	カバノキ属	3	1	2	3	3	3	
Corylus	ハシバミ属					1		
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1	3	2		3	2	5
Castanea crenata	クリ	4	5	3	4	3		6
Castanopsis	シイ属	4	10	5	5	5	1	6
Fagus	ブナ属	1	4	1	1	1	2	2
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	15	13	25	8	15	7	19
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	15	28	20	11	16	13	25
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	5	4	1	1	3		
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	4	2		3	2	4	4
Mallotus japonicus	アカメガシワ				1		1	
Zanthoxylum	サンショウ属					2		1
Melia	センダン属						1	1
Ilex	モチノキ属					1	1	
Acer	カエデ属			1	1		2	
Aesculus turbinata	トチノキ				2		1	
Vitis	ブドウ属			1		1		
Elaeagnus	グミ属			1	1		9	
Diospyros	カキ属				1			
Symplocos	ハイノキ属				1			
Styrax	エゴノキ属					1	1	
Oleaceae	モクセイ科				30	5	20	1
Ericaceae	ツツジ科					1		
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	6	7	1	31	77	33	27
Lonicera	スイカズラ属				1	1		1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		4	10	6	13	6	6
Rosaceae	バラ科				1		1	
Leguminosae	マメ科						1	
Nonarboreal pollen	草本花粉							
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	10	2		2	13	3	4
Alisma	サジオモダカ属	1						
Sagittaria	オモダカ属	1	1	1				
Caldesia parnassifolia	マルバオモダカ			1			1	
Gramineae	イネ科	189	160	173	113	154	162	177
Oryza type	イネ属型	19	34	40	24	18	12	18
Cyperaceae	カヤツリグサ科	30	39	38	16	28	16	23
Aneilema keisak	イボクサ						1	
Monochoria	ミズアオイ属			1	2	2	2	1
Allium	ネギ属			1				
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	3	1	1	1	3	1	4
Rumex	ギシギシ属	2	2	1	1	1	4	3
Fagopyrum	ソバ属	1	1	1	1		2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	13	3	2	19	25	23	12
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	1	3			1	1
Ranunculus	キンポウゲ属		1	3		4	3	
Cruciferae	アブラナ科	10	10	10	17	14	23	11
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ						1	
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属							1
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科	4	7	2	1	5	1	1
Apiodeae	セリ亜科	1		1	2		1	
Labiatae	シソ科				1			
Solanaceae	ナス科	1			2	2	3	2
Lactucoideae	タンポポ亜科	1		1	3		2	4
Asteroideae	キク亜科	1	2		4		5	2
Xanthium	オナモミ属						1	
Artemisia	ヨモギ属	33	46	26	14	29	13	21
Carthamus tinctorius	ベニバナ	1		1		1		
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore	単条溝胞子	4	4	4	5	3	1	5
Celatopteris	ミズワラビ		1		2		1	
Trilate type spore	三条溝胞子	7	7	3	3	2	1	7
Arboreal pollen	樹木花粉	83	149	106	162	170	143	145
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	4	10	7	13	8	6
Nonarboreal pollen	草本花粉	322	310	307	223	299	281	285
Total pollen	花粉総数	405	463	423	392	482	432	436
Unknown pollen	未同定花粉	3	7	4	9	6	6	3
Fern spore	シダ植物胞子	11	12	7	10	5	3	12

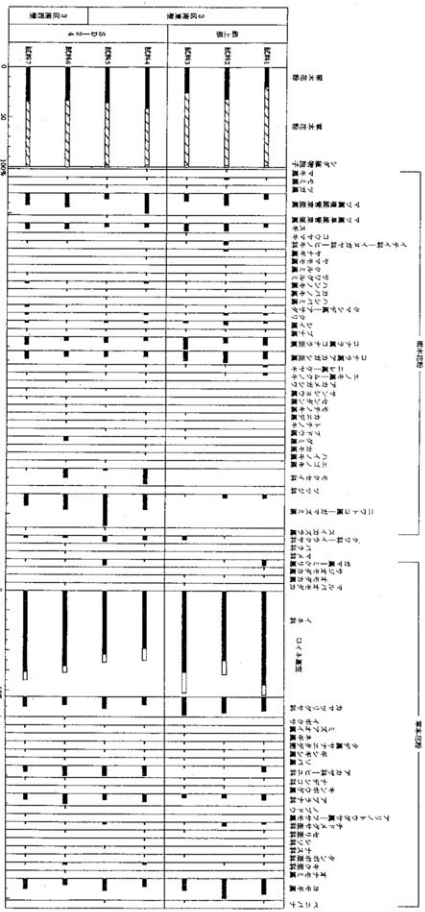


図1　米子城跡第25次調査における花粉ダイアグラム

表2　米子城跡第25次調査における寄生虫卵分析結果

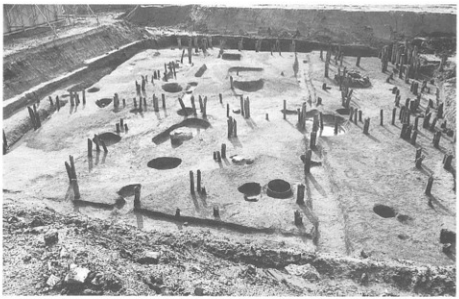
(×10個／0.1cc)

分類群		試料						
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7
Helminth eggs	寄生虫卵							
Ascaris	回虫卵	16		1		11		10
Trichuris	鞭虫卵	6		1				5
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵			1	2			
Metagonimus-Heterophyes	異形吸虫卵					6		
Diphyllobothoyium mansoni	マンソン裂頭条虫卵	1				6		
Total	計	23	0	3	2	23	0	15
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

図　　版

1区全景
（北西から）

2区全景
（北西から）



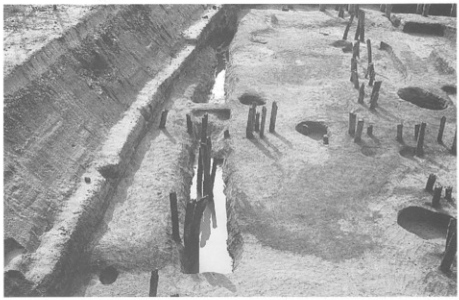
3区全景
（北東から）

〔図版2〕

SD－01～03
（手前:SD－01、奥:SD－02）

SD－04・05
（手前:SD－05、奥:SD－04）

SD－06（北東から）



SD－25・26
（手前:SD－26、奥:SD－25）

SD－06・29・31
（手前:SD－06、
奥:SD－29・31）

SD－18～20
（左:SD－18、右:SD－20
奥:SD－19）

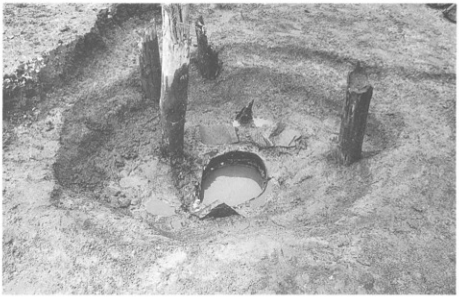
〔図版4〕

SD－15・16
（右:SD－15、左:SD－16）

SD－17
（南東から）

SD－24
（南東から）

SE－01



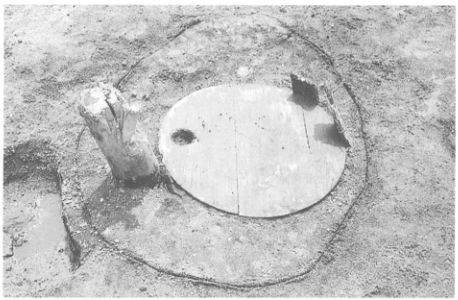
SE－03

SE－07

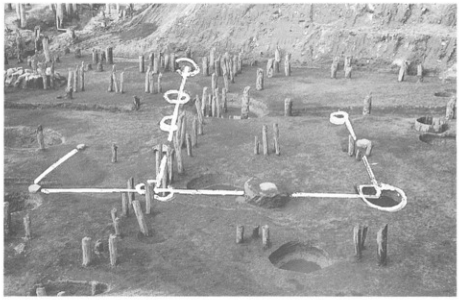
〔図版6〕

SE－12

SE－13



SE－16

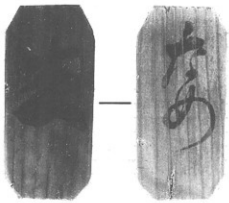


SB−01

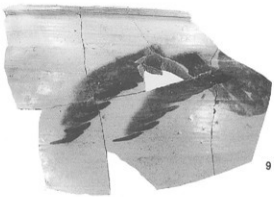
埋設桶1

埋設桶2

〔図版８〕


4

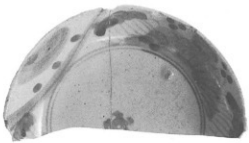
21


9

22

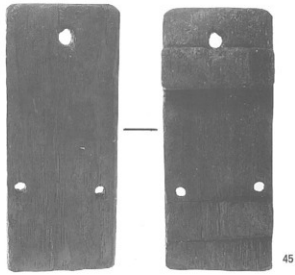
11

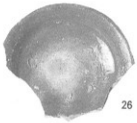
23


14

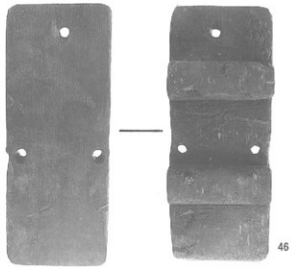
SE－04・08・09、SD－01・02出土遺物

25


45


26

29


46

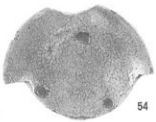
36

37

48

SD－14・15 出土遺物

〔 図版 10 〕

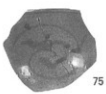

54

69

61

70

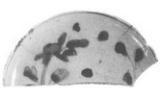
63


75

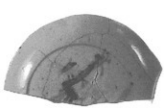
81

65

76


77

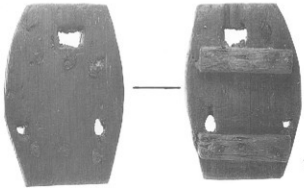
67

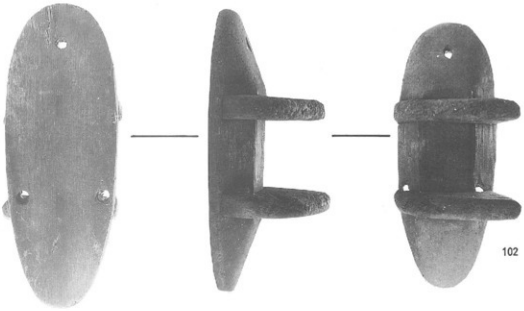

78

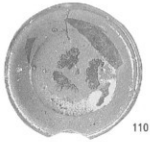
SD－17 出土遺物

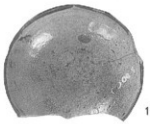
93

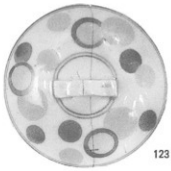
97


101


102


110


111


123

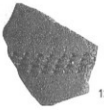
SD－17・20・24 出土遺物

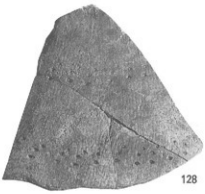
〔図版 12〕

124

125

126


127

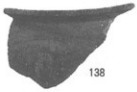

128

129

133

139

137

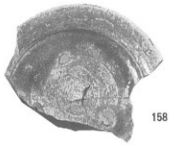

138

142

152

155

遺構外出土遺物（弥生土器・須恵器・土釜）


158

168

171

181

174

182

175

183

176

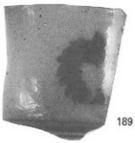
184

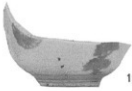
遺構外出土遺物（陶器）

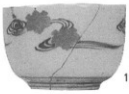
〔 図 版 14 〕

187

188


189

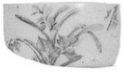

190

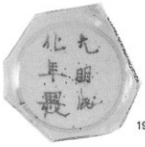

191

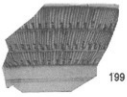
195

192（高台）

197

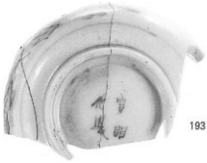

198


192（見込み）

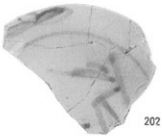

199

201

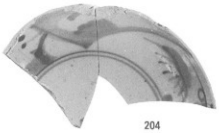
186

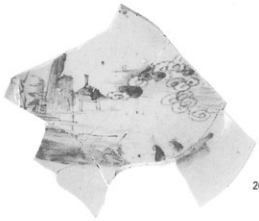

193

遺構外出土遺物（磁器）1

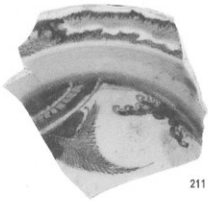

202

203


204


209

222（表）


211

222（裏）

228

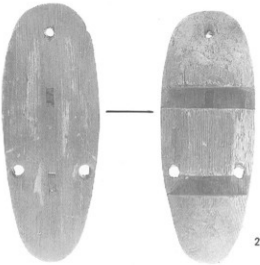
遺構外出土遺物（磁器）2

〔図版16〕

266

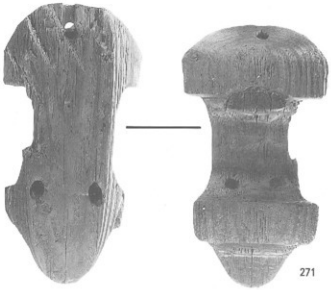
267

278


274

279

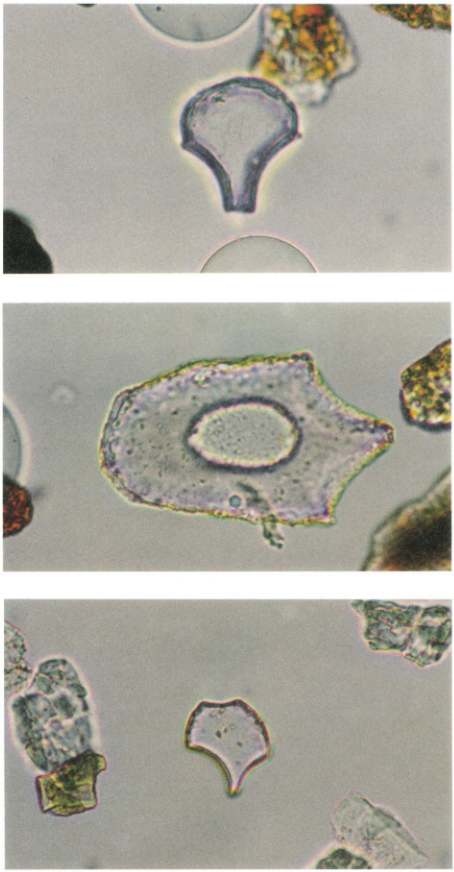
280


271

283

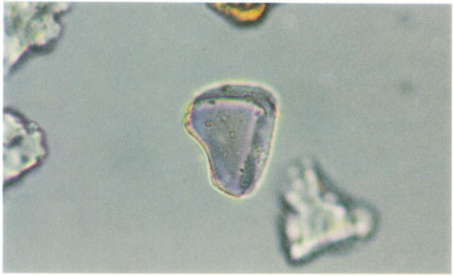
遺構外出土遺物（木製品）

〔図版 17〕

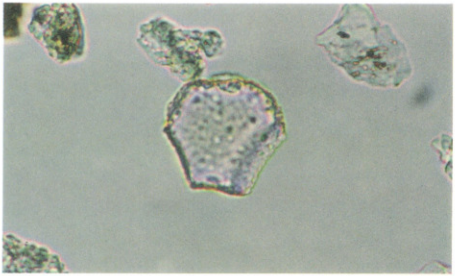


植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真（1）

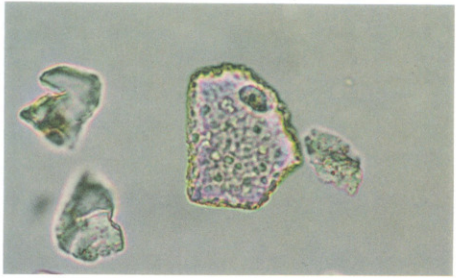
〔図版 18〕



ウシクサ族
（ススキ属型）



タケ亜科
（ネザサ節型）



タケ亜科
（クマザサ属型）

0　100μm

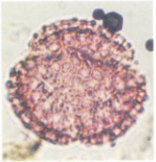
植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真（2）

1　マツ属複維管束亜属

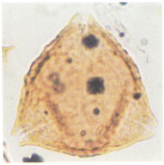
2　シイ属

3　コナラ属コナラ亜属

4　コナラ属アカガシ亜属



5　モクセイ科



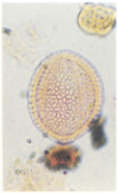
6　グミ属

7　ガマ属－ミクリ属

8　イネ属型

9　カヤツリグサ科

10　アカザ科-ヒユ科



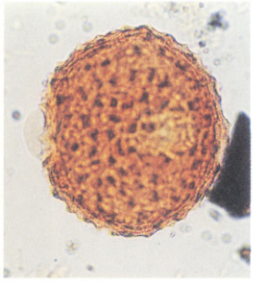
11　アブラナ科

12　ネギ属

13　ギシギシ属

14　ソバ属

15　ソバ属

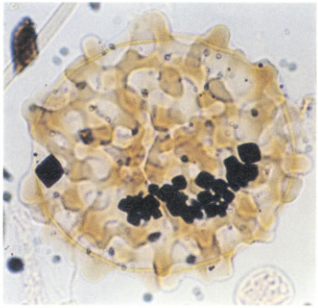


16　ベニバナ

10μm

花　粉　遺　体

〔図版 20〕



1 回虫卵

2 肝吸虫卵

3 肝吸虫卵

4 鞭虫卵

5 鞭虫卵

6 鞭虫卵

7 マンソン裂頭条虫卵

8 マンソン裂頭条虫卵

10μm

寄 生 虫 卵

報告書抄録

ふりがな	よなごじょうせき
書名	米子城跡　第25次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	30
編著者名	高橋浩樹
編集機関	財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室
所在地	〒683－0822　鳥取県米子市中町20　TEL(0859)22－7209
発行年月日	西暦　1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
米子城跡(よなごじょうあと) 第25次調査	鳥取県米子市(とっとりけんよなごし) 西町(にしまち)	31202	719	35度 25分 34秒	133度 19分 49秒	19980803～ 19981216	1,288㎡	鳥取地方・家庭裁判所米子支部庁舎新営工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
米子城跡 第25次調査	城下町	江戸時代	井戸15基 井戸状遺構1基 溝状遺構31条 土坑28基 埋設桶2基 柵列2条 建物跡1棟	肥前系陶器、肥前系磁器、備前焼、瀬戸・美濃系陶器、木製品（下駄、箸、木簡、曲物、銀、傘、櫛等）、漆器、石製品（碁石、砥石）、土錘、金属製品（古銭、煙管等）	屋敷の境界溝を検出するとともに、屋敷の範囲を確定できた。

(財) 米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書30

米子城跡　第25次調査

1999年3月

編集・発行 ／ 財団法人 米子市教育文化事業団
〒683-0822　鳥取県米子市中町20
印　　刷 ／ (有)　み　ど　り　印　刷